

ボストン公立図書館と日曜開館問題（1864-1872年）

川崎 良孝・川崎 佳代子

The Debate on the Opening of the Boston Public Library on Sundays, 1864-1872

Yoshitaka KAWASAKI, Kayoko KAWASAKI

1

アメリカ大都市で最初の公立図書館であるボストン公立図書館は、メイソン（Mason）街アダムズ校舎の2つの部屋で1854年3月20日に開館した。そして1858年にはボイルストン（Boylston）街に新館を建設し、1895年にはコプリー広場（Copley Square）にアメリカを代表する壮大な図書館を設置した。一方、ジャスティン・ウィンザー（Justin Winsor）の館長時代（1868-1877）から、市全域へのサービスを目指して積極的に分館設置に着手する。アメリカ最初の分館イースト・ボストン分館（1871）を皮切りに、サウス・ボストン分館（1872）、ロックスバリー分館（1873）、さらにチャールスタウン、ブライトン（1874）、ドーチェスター（1875）、サウス・エンド、ジャマイカ・プレイン（1877）という具合で、いずれも固定施設、専任職員、固有の蔵書を有する分館であった。

ボストン公立図書館は19世紀のアメリカ公立図書館界の指導者であり、その歴史上の意義には確固たるものがある。同館の影響は国内に留まらず国外にも及んでいる。一方、ボストンという地であるがために、世論を巻き込む大きな問題になった事柄があるように思われる。現在の時点からみると、ささやかな事柄と思われるかもしれないが、当時にとっては大きな問題であった。そうした事柄には、「バックスの巫女騒動」と「日曜開館問題」があり、いずれもボストンの宗教観や道徳観が深く関わる問題であった。いっそう大きくみると世俗化の問題であり、ヴィクトリア時代の価値観であるが、それらがピューリタンの地であるボストンで最も鮮明に提示されたということでもある。

「バックスの巫女騒動」（1896-1897）は、コプリー広場の新館建設に際して、図書館の中庭に噴水を置き、そこにフレデリック・マクモニーズ（Frederick MacMonnies）のブロンズ像「バックスの巫女」を置くことにまつわる騒動である。この像をめぐるのは広くボストン全体を巻き込む形で、道徳論争が起こった。結局、像は図書館には置かれず、当時は同じコプリー広場の一角にあったボストン美術館（Museum of Fine Arts）に収まったのである（例えば以下を参照。ウォルター・ホワイトヒル『ボストン市立図書館100年史：栄光、挫折、再生』川崎良孝訳、日本図書館協会、1999、p. 193-199（「バックスの巫女騒動とボストンの道徳観（1896-1897）」）；Walter Whitehill, "The Vicissitudes of Bacchante in Boston," *New England Quarterly*, vol. 27 (December 1954) p. 434-454)。

いま1つが本資料紹介で扱う「日曜開館」問題である。アメリカの比較的大きな町における

住民を対象にした図書館をみると、1869年に日曜開館を導入したミルウォーキー公立図書館は早期の例であろう。そして1870年にはフィラデルフィア商事図書館 (Mercantile Library)、1871年にはシンシナチ公立図書館、1872年と1873年にはニューヨーク商事図書館、ウースター (Worcester) 公立図書館、シカゴ公立図書館などが日曜開館を開始している。最終的にボストン公立図書館は1873年2月9日、日曜開館の最初の実験として雑誌閲覧室を2時から9時まで開館し、そののち同館での日曜開館は拡大していく (2月9日の開館については以下を参照 ("B. Report of the Superintendent," *Report of the Trustees of the Public Library of the City of Boston*, 1873, p. 29)。ところで、日曜開館問題が浮上し、市議会が好意的に検討していた1872年6月20日に、W.M.ガストン (W.M. Gaston) 市長は市議会と図書館理事会にたいして、メッセージを出している (*Mayor's Message, Giving His Reasons for not Approving the Order Concerning the Opening of the Public Library on Sunday*, 1872, Boston, *City Document*, No. 69)。この文書は市長として日曜開館に反対する論拠を示すことで、日曜開館への動きを阻止しようとしたものである。その中で、市長は過去の動きを簡略にまとめている。当然ながら、それは市議会や市長にまで関係してきた場合に限っている。単に新聞や個人が意見表明したものは範囲外である。

市長の1872年文書によると、ボストン公立図書館の日曜開館問題が最初に浮上してきたのは1865年である。1865年の場合、市議会は日曜開館を求めたのだが、市長が拒否権を使っている。続く1867年の場合、市議会は日曜開館を検討するための委員会を設け、その委員会は初めて市法務官 (City Solicitor) に法的検討を求めている。そして市法務官は州法違反になるとの意見書を提出し、委員会はその結果を尊重したのである。さらに1870年にも日曜開館が市議会の委員会で検討されている。委員会の多数派は「道徳的および教育的観点から」日曜開館に賛成であるとしつつ、同時に法律上の問題があるので、まずマサチューセッツ州法の変更について市長が州議会に働きかけるように求めた。この市議会からの命令に従って、市長は州議会に州法の修正を働きかけたが失敗に終わっている。こうした経過を経て、1872年にも日曜開館が検討され、既述のように1873年2月に実験的に日曜開館が開始されたのである。

以上がボストン公立図書館の日曜開館問題に関する公的な動きである。この問題をめぐる動きは1867年頃から本格化し、それにともないさまざまな意見が出されている。本稿ではそうした基礎資料を翻訳する。それは以下のようである。

- (1) 公立図書館に関する合同常任委員会「公立図書館の日曜開館に関する報告」(1864年)
Report of the Opening of the Public Library on Sundays, 1864, Boston, *City Document*, No. 80.
- (2) 市長「公立図書館の日曜開館に関する市長の反対」(1865年) *Objections of the Mayor Opening the Public Library on Sundays*, 1865, Boston, *City Document*, No. 49.
- (3) 公立図書館に関する合同常任委員会「公立図書館の閲覧室における日曜開館に関する報告」(1867年) *Report on the Opening the Reading Room of the Public Library on Sundays*, 1867, Boston, *City Document*, No. 63.
- (4) M.フィールド・ファウラー『主の日にボストン公立図書館を開館するにあたっての抗議

あるいは諫言：安息日を覚え、これを聖とせよ』（1867年）*Protest or Remonstrance of M. Field Fowler, Against Opening the Doors of the Public Library, Boston, on the Lord's Day*, Boston, Rockwell and Rollins, 1867. この文書はメトロポリタン鉄道馬車会社（Metropolitan Railway Company）の創設者の1人であるM. フィールド・ファウラー（M. Field Fowler）の個人的な訴えである。

- (5) チャールズ・M. エリス『ボストン公立図書館閲覧室の日曜午後の開館に関する論争』（1867年）*Argument for Opening the Reading Room of the Public Library of the City of Boston*, Boston, A. Williams, 1867. この文書はボストンの著名な法律家であるチャールズ・M. エリス（Charles M. Ellis）による個人的な訴えである。
- (6) 公立図書館に関する合同常任委員会「公立図書館の閲覧室における日曜開館に関する報告」（1867年）*Report on Opening the Reading Room of the Public Library on Sundays*, 1867, Boston, *City Document*, No. 75.
- (7) 公立図書館に関する合同常任委員会「公立図書館の日曜開館に関する委員会報告」（1870年）*Report of the Committee on the Opening of the Public Library on Sunday*, 1870, Boston, *City Document*, No. 97.
- (8) M. フィールド・ファウラー『図書館の日曜開館と鉄道馬車に関するエッセイ』（1872年）*Essay on the Sunday Library and Horse Car Questions*, 1872, Boston, Alfred Mudge & Son. この文書もファウラーの個人的な訴えである。
- (9) 市長「市長メッセージ：公立図書館の日曜開館の命令を承認しない理由」（1872年）*Mayor's Message, Giving His Reasons for not Approving the Order Concerning the Opening of the Public Library on Sunday*, Boston, 1872, *City Document*, No. 69.

1867年の状況を示した資料(3)(4)(5)(6)について少し説明すると、1867年5月27日にボストン市議会の委員会である「公立図書館に関する両院合同委員会」は、日曜開館をすべきであるとの見解を議会に報告した（資料(3)）。それにたいして市議会は聴聞会の開催と再審議を同委員会に求めた。そのため1867年7月中旬に主に日曜開館反対者の意見を聞くために一連の聴聞会を4回開催している。そこでは40名を超える反対者が意見を表明し、オールド・サウス教会の牧師ジェイコブ・マニング（Jacob Manning）、市議会議長を務めたW.W. ストーリー（W.W. Story）、それに図書館理事長ウィリアム・グリーンノウ（William W. Greenough, 1866年から理事長）など、ボストンの有力者がいた。ファウラーとエリスの文書(4)(5)は聴聞会での意見表明であり、それを文書にしたものである。例えばエリスの文書(4)は、聴聞会での主張をさらに編集して刊行したものである。なおこのエリスの文書は1872年の日曜開館論争のときにも再版されている。こうした聴聞会の模様も検討して、「公立図書館に関する両院合同委員会」は7月27日に議会に報告書を提出し、そこでは聴聞会で浮上してきた法律問題に焦点をあて、日曜開館問題を留保するように主張した。

9つの文書の内、エリスの文献 (5) は小さな活字の40頁に達する文書で日曜開館を支持しているが、訳では重要部分だけの翻訳に留めている。エリスの英語は難解というか、構造的にしっ

かりしておらず、翻訳は困難を極めた。その他の文書はすべて全訳である。なお最小限必要と思われる書誌事項などについては [] に補記した。

なお、利用状況に触れておくと、1873年2月9日に午後2時から9時まで開館した雑誌閲覧室について、館長ジャスティン・ウィンザー (Justin Winsor) は、日曜の利用者は週日に利用する人とは相違するとし、これを最も好ましい特徴としている。また利用者は礼儀正しいが、週日より利用は少なく2分の1から4分の3と報告している。また分館での閲覧室利用が少ないと指摘している ("Report of the Superintendent," *Report of the Trustees of the Public Library*, 1873, Boston, *City Document*, No. 88, p. 29)。

例えば『ボストン公立図書館理事会報告』第25号には、1874年から1877年までの日曜開館の様式が出ており、それは表「雑誌閲覧室の日曜日の利用状況」のようになっている。

<表>雑誌閲覧室の日曜日の利用状況

図書館名	雑誌の数				日曜開館日数				日曜の平均利用冊数				最大の利用冊数 (月)			
	1874	1875	1876	1877	1874	1875	1876	1877	1874	1875	1876	1877	1874	1875	1876	1877
中央 (Central)	418	515	481	509	52	52	53	52	421	473	476	487	603,Jan.	646,Mar.	615,Dec.	626,Nov.
イースト・ボストン (East Boston)	41	47	47	35	52	52	53	30	141	113	121	105	241,Jan.	198,Feb.	192,Dec.	245,Nov.
サウス・ボストン (South Boston)	41	56	61	52	52	52	53	52	132	148	130	60	226,Nov.	310,Mar.	252,Dec.	110,Dec.
ロックスバリー (Roxbury)	67	77	77	71	43	52	53	52	74	68	87	47	132,Feb.	97,Feb.	133,Mar.	83,Dec.
チャールズタウン (Charlestown)	82	88	81	73	16	44	53	17	82	50	53	23	91,Feb.	78,Mar.	77,Jan.	33,May.
ブライトン (Brighton)	23	23	19	19	17	51	...	...	...	...	...	...				
ドーチェスター (Dorchester)	...	25	32	36	...	...	...	...	...	...	...	...				

出典: "Appendix xxii," *Twenty-Fifth Annual Report of the Trustees of the Public Library*, 1877, Boston, *City Document*, No. 66, p. 106.

この表からは以下のようなことがわかる。中央館の場合、毎日曜日開館し、平均利用冊数は約450冊である。例えば1877年をみると、週日も含めた1日の平均利用冊数は853冊、日曜が487冊なので、日曜日は平日に比べて半分を少し上回る程度の利用である。一方、分館での雑誌閲覧は全体としてみると年を経るにつれて、利用が減退している。なお、ブライトン分館では1874年と1875年には日曜開館していたが、1876年には開館をやめてしまった。雑誌数自体が少ないので、利用者からみると利用する価値がなかったのかもしれない。1877年の分館ごとの状況をみておくと、イースト・ボストンは日曜が105冊に対して、1年を通した1日平均の利用は97冊、サウス・ボストンは各々60冊と110冊、ロックスバリーが47冊と63冊、チャールズタウンが23冊と78冊となっている。すなわち、イースト・ボストンを除いて、日曜日の利用冊数は全体と比べて非常に低かったのである。

以下に資料の翻訳を掲げていくが、日曜開館問題は宗教論争の意味合いもあるので、理解を容易にするために、安息日 (Sabbath)、日曜日 (Sunday)、主の日 (Lord's Day) などの語が歴史的にどのように変遷してきたのかまとめておくことにする。

2

公立図書館の日曜開館問題がとくにボストン市においてかまびすしく浮上したのは、同市が、ニューイングランドの中でもピューリタン色の強い都市であったことが大きな理由と思われる。17世紀にヨーロッパから信仰の自由を求めて新大陸アメリカに移住したキリスト教徒たちは、自らの渡航をモーゼによる「出エジプト」になぞらえた。そして英国のピューリタンの伝統を持ち込み、厳格な形の日曜日遵守を新大陸でも守るようになった。入植地では、日曜礼拝法が制定されたが、コネティカットで出版した新聞の色から「青い律法」(blue law)として知られる。

ピューリタンは日曜日を安息日と同一視したが、リベラルなキリスト教徒はそれに反発した。アメリカにおけるユダヤ人、セブンスデイ派のキリスト教徒は、土曜日を安息日として守っていたので、日曜日—安息日—主の日に関して、アメリカでは大きな論争が繰り広げられていた。図書館の日曜開館問題はそうした宗教的背景を抜きにしては語れない。ここでは、安息日の根拠となる十戒の第四の掟と安息日、主の日、日曜日をめぐってキリスト教会の理解を歴史的に概観してみる。

「出エジプト記」第20章に十戒が示されている。第四の掟に関わる部分は以下である。

安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。

六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならない。

しかし七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはどんな仕事もしてはならない。
——あなたも、あなたの息子、娘、それにあなたの男奴隷、女奴隷、家畜、また、あなたの町囲みの中にいる在留異国人も——

それは主が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にいるすべてのものを造り、七日目に休まれたからである。それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された。

十戒はモーゼがユダヤの民を引き連れエジプトを脱出した後、シナイ山で神から授けられた戒律とされている。第四の掟はバークレー (William Barclay) によれば、「一つの社会的、人道主義的法律だったのであり、別に宗教的な規則なのではない。礼拝などの宗教的儀式に関しては〔十戒は〕何も言われてはいないのである」(バークレー『十戒：現代倫理入門』牧野留美子訳、新教出版社、1980, p. 35)。

第四の掟は、労働から人を休ませる、最も恵み深い律法と考えられている。創造主がすべての創造のわざを終えられた次の日ということから、安息日は7日目とされていたので、土曜日であった。1週を7日に区分すること(7曜)はユダヤ民族の発明ではないが、安息日としての他の曜日と区別したのはユダヤ人である。

しかし、こうした原理が規則となり、律法として形式主義に陥るのはよくある。第四の掟は仕事を禁じているので、ユダヤ人の律法学者は、仕事とは何かを詳細に検討し、仕事を39に分類した。それを注意深く守ったのはパリサイ派の人であった。こうして、労働者の権利・健康・安寧を守るための日が禁止の日となり、人びとを拘束するに至った。

安息日の性格が変化したのは旧約と新約の間の時期であったといわれるが、新約の時代には、

安息日はシナゴグで礼拝しなければならない日となっていた。律法学者やパリサイ人が安息日の禁止事項に躍起となっていた頃、キリストは安息日に人を癒すなど、パリサイ人が「仕事」とみなす行いをした。それを咎めたパリサイ人たちにキリストが「安息日は人間のために設けられたのです。人間が安息日のために作られたわけではありません」と述べたことをマルコは記している（マルコによる福音書2: 27）。この箇所は後の論争の根拠としてしばしば引用されている。

ところが、キリスト者にとって土曜日以上に聖なる日が出現する。十字架に架けられ死んで葬られたキリストが復活したと言われる日曜日で、これは週の第1日目である。これ以後、日曜日が教会生活で特別な日となっていく。「主の日」(the Lord's Day) という表現が文献として登場するのは、ヨハネによる黙示録で、紀元80年から90年くらいである。もちろんユダヤ教徒は依然として土曜日＝安息日を遵守していた。一方で、ユダヤ教から熱心なキリスト教徒となったパウロは、信仰者には毎日が聖日という表現をしている。

やがて安息日より「主の日」が優勢になり、2世紀の聖イグナティウスや聖ユスティヌスは安息日を否定したくらいである。しかし、この当時、主の日にはすべての仕事を中止しなければならないという厳しい指示はなかったらしい。5世紀頃まで修道院の尼僧が礼拝後に仕事をしていたことが記されている（ヒエロニムスの書簡集）。

とはいえ、コンスタンティヌス帝が321年にキリスト教を公認し、主の日には都市において仕事を休むべきという法令を出したこともあり、次第に主の日には仕事が禁じられる方向に向かった。581年のメイコン教会会議では仕事の完全中止を定めた。主の日は休息の日でなければならないようになったのである。

こうなると、主の日と安息日が混同されるのは自然の流れである。アルクィヌス（Alcuin, 735-804）などは主の日に仕事をするのは第四の掟に反すると主張し、再び安息日の根拠となる第四の掟が持ち出されるようになる。安息日が主の日が変わったとトマス・アクィナスが言うとおりに、週の7日目から1日目に変わったという曜日の移行にすりかわった。教会は、かつてパリサイ派がしていたように、主の日の禁止事項を列挙し始めた。これには、教会が組織化され、礼拝が義務化されたことと関係があるだろう。

しかし、振り子は再び反対方向に振れ戻る。再度安息日と主の日を区別しようとしたのは、宗教改革者たちであった。ルター（1483-1546）、カルヴァン（1509-1564）、ツヴィングリ（1484-1531）などの宗教改革者は、第四の掟はキリスト教徒には廃棄されたものとし、主の日と安息日の区別を明確にしようとした。

一方、いったん混同された主の日＝安息日は根強く残り、16世紀には再び優勢になる。つまり、ユダヤ教の安息日に関する権威と慣習はそのまま主の日に含まれているという考え方である。これが法令化されるのがピューリタンの時代である。また、この時期に「ウェストミンスター信仰告白」が制定され、厳しい安息日遵守主義（sabbatharism）と同調することになる。

バークレーは、安息日と主の日を同一視することは聖書的には正しくないと述べているが、17世紀に新大陸に移住した人は安息日遵守主義を携えていったのである。本資料紹介で紹介す

るファウラーのエッセイでは、明らかに主の日と安息日の混同がみられる。この頃までには、アメリカでも安息日と主の日の区別が議論の対象になっており、そこに休息とレジャーの問題、仕事とリクリエーションの内容などの論争も加わり、日曜問題は紛糾していく。これには、宗教問題だけでなく、アメリカの経済的、社会的な発展が大きく関わっているが、ここでは、その点は扱わない。

(1)

公立図書館の日曜開館に関する報告

ボストン市、市文書第80号, 1864年

Report of the Opening of the Public Library on Sundays,
1864, Boston, *City Document*, No. 80.

ボストン市

市議会上院 1864年9月12日

コミュニティの知性、道徳、そして宗教が発展する事柄は、常に市政府の育成を受けるべきである。従って次のように命令する。

命令：公立図書館を一般住民の利用のために、他の曜日と同じように午前10時から午後10時まで日曜開館すべきである。

市議会上院 1864年9月19日

読会され、「公立図書館に関する委員会」に付託する。委員会は活字にして報告する権限を有する。

同意を求めて回す。

オーティス・ナークロス (ORTIS NORCROSS) 委員長

市議会下院 1864年10月6日

同意

ジョージ・S.ヘイル (GEORGE S. HALE) 議長

ボストン市

「公立図書館に関する委員会」に付託されてきた上記の命令に対して、本委員会は検討し、次のように報告する。

報告

本件は今回に初めて提示されたものではない。

市条例によって「公立図書館の全般的な管理運営」を委ねられている図書館理事会は、1859年10月18日に本件を検討し、発声投票を行った。その結果「図書館理事会の意見は図書館の日曜開館は不必要にして不適当である」と満場一致であった。本委員会の知るところでは、そのときに問題とされたのは閲覧室の開館のみであり、図書館全体の開館という考えは瞬時たりとも浮上しなかった。

本委員会が知るところでは、この問題が国内外の都市で提起されると、常に日曜開館は拒否されてきた。

閲覧室だけを日曜の午後と夕刻に開館する問題は、本委員会でも提起され、日曜開館全体について図書館理事会と会議を開くと決定した。この会議でわかったことは、図書館理事会は満場一致で1859年の投票と同じであったが、いっそう強い語句で反対の表明をしていた。

イングランドで数年前に公立図書館の日曜開館が提案されていたので、本委員会は関連箇所の写しをとった。すなわち図書館経営の標準的な権威が示す文——エドワード・エドワーズ氏の『図書館覚え書き』(Edward Edwards, *Memoirs of Libraries*, London 1859, vol. 2, p. 1044 and 1045) ——によると、「——公立図書館の日曜開館の是非——問題に関する英国でのごく最近までの議論は、大多数の人にとっては不必要なことと思われていたようである。英国の教育ある思慮深い人の過半数は、日曜開館を依然としてキリスト教徒の義務に、例え字義どおりではなくても、精神面で明白に抵触していると見なしている」。

「少数派でもかなりの人は、日曜開館が少なくとも間接的にはあるが、いまでもぞっとする悪徳をさらに悪化させる一步になると考えている」。

『よい読書に害はない』、多くの『他の公共の場が開かれている』、『日曜日の余暇を単なるくだらない娯楽』や他の平凡な場で『過ごすよりも、図書館で過ごす方がはるかに好ましい』との主張は、単に表面的な見方にすぎない。それらは間違いなく本当であろうが、要点をついたことは何の証明もしていない」。

「実際、図書館の管理者や職員に安息日の休息が必要でないこと、また責任者であるコミュニティの行政機関の委員会にとって図書館を開館することが公共の安全装置、つまり現在、金持ちが単に意志と楽しみで博愛精神を持つことに依存せずに、貧者のための最高の恵まれた権利を守っているのだが、それを壊さずに済むなら、また最後に、公立図書館 (Town Libraries) の図書貸出 (Lending) という既に行っている業務が、図書館を一番利用するはずの人びと全員に常に完全に利用できる訳ではないということが示されるならば、そのときには日曜開館を再検討する土台ができるだろう。それまではっきり言わせてもらえれば、ほとんどすべての場合、日曜開館の提案を否定してきた有力な世論は十分に正しいと確信する」。

川崎：ボストン公立図書館と日曜開館問題（1864-1872年）

「私が示した要点は、決してこの重要問題の全要素を論じ尽くしてはいない。しかしこの場では、それで十分であろう」。

こうしたさまざまな理由で、本委員会は図書館理事会の意見、すなわち図書館の日曜開館は不必要にして不適当という意見に完全に同意する。本委員会は命令を無期限に延期することを勧告する。

委員会を代表して。

G.W.ウォーレン（G.W. Warren）委員長

(2)

公立図書館の日曜開館に関する市長の反対

ボストン市、市文書第49号、1865年5月15日

Objections of the Mayor Opening the Public Library on Sundays,
1865, Boston, *City Document*, No. 49.

ボストン市

市長部局

市役所 ボストン 1865年5月15日

ボストン市上院に：

貴市議会の委員会を源とする市議会の命令は、図書館理事会に対して、公立図書館の閲覧室を午後5時から午後10時まで日曜開館する措置を講じるよう要請するものである。この市議会の命令が、通常の手続きに沿って私の正式な承認を求めて回されてきた。私には日曜開館の措置が賢明かどうか決して自明ではない。またボストン市の既定の習慣に対する非常に重要な革新なので、公立図書館の最も寛大な支援者や最善の友である市民層に大きな動揺が生じた。私は命令に署名せず、再検討を求めて市議会に送り返す。

ボストン公立図書館は、当市が当然にも誇りとする施設の1つである。公立図書館はあらゆる境遇の人にとって、計り知れない祝福の源である。公立図書館は寄付や利益の点で、最も樂觀的な創設者の期待を上回ってきた。そして最もリベラルな経営がされ、世界中のどの図書館よりも読者に立派な施設であると信じられている。

明らかに、この喜ぶべき成功の大きな部分は、常に任務について関心を抱いてきた有能な図書館理事会のおかげである。

図書館理事会は住民の求めを学び、充足させてきた。そして住民が必需として求めるあらゆる要求を満たすために、常に骨折りをしてきた。理事会の知識と経験によって、理事会は本件について意見を供する十分な資格がある。

私の知るところによると、図書館理事長エヴァレット（[Edward] Everett [1794-1865]）氏が死ぬ以前に、日曜開館について理事会の見解が問われた。そして理事会は満場一致で、安

息日の図書館開館に反対している。告白すると、理事会の判断は私に重要な影響を与えた。市政府は長年にわたって、理事会の図書館経営に絶対的な信頼を置いてきた。図書館理事会という立場によって、理事会は図書館にとって最善の事柄や奉仕対象者を知る機会を得た。理事会の意見が本件の解決に重視されるべきと言うのは正しい。

今回、市議会の命令に反対するいま1つの理由は、住民からの要求がない点にある——日曜開館を求める1つの請願も市議会に提出されていない。本件が付託された「公立図書館に関する委員会」報告には、日曜開館のためのステップが示されておらず、一種の妥協を勧告している。すなわちもともと審議されていたほぼ全日の開館に代えて、閲覧室を午後と夕刻の限られた時間に開館すべきというのである。

閲覧室開館によって、教会に行かない多くの人が来館すると主張されている。残念なことだが、教会に行かない人は、一般的に自分の知的、道徳的な向上に大して関心を持たない階級である。もし主張されていることが確かで、事実によって検証されたとすると、閲覧室の収容人数には大いに限界があるので、閲覧室は真面目な読書に欠かせない静かで落ち着いた場ではなくなる。閲覧室は大混雑して、すべての人が不愉快になる。したがって、かなりの数の人にとっては、実質的な利益を得ることにはならないであろう。

これらの反対に加えて、市政府が日曜開館を設定すると先例になり、宗教の大義と良き道徳に深甚な影響を及ぼすと懸念される。

ユダヤ人の安息日にみられる多くの厳格な儀礼的行為や規律を無視してはいるが、それでもキリスト教コミュニティとして、少なくともキリスト教徒の安息日に妥当な事柄に従うように、私たちの権限の行使は制限されている。大都市は人口が密集し、コミュニティに尊厳と徳を与える健全な抑制を壊す傾向にある。それ自体は反対しがたい行為が、公共の福祉の不誠実な適用の事例を示すことで、有害になることがありうる。市政府が用心すべきは、私たちの良き市の特徴である性格の基準を低下させるような、公的な措置を取らないことである。

州法および一般的な慣行の精神は、主の日に不必要な労働や娯楽を行うことに反対している。この規定はすべての階級の人の利益のためである。女性が多いのだが、公立図書館で働いている人は、他の部署で公共サービスに携わる人と同じように、7日に1日の休息という特権を持つべきである。それに懸念するのだが、公立図書館の一部分を数時間開館することが、単なる1つの習慣の開始にすぎず、最終的には同じ理由づけで全部署に拡張されて、全日にわたって開館することになる。このようにして、もはや安息日が図書館で認識されなくなることを心配する。当市の公共施設に日曜開館という習慣を導入することは、当市の名声を高めることにはならない。

こうしたいくつかの観察とともに、私は命令を送り返す。私は図書館理事会がこれまでと同じように、当市に対して信頼できる図書館管理を実施している限りにおいて、理事会を完全に信頼しており、理事会の掌中にある権限に干渉することに気乗りがしない。

F.W.リンカーン・ジュニア (F.W. LINCOLN, Jr.) 市長

(3)

公立図書館の閲覧室における日曜開館に関する報告

ボストン市、市文書第63号, 1867年5月27日

Report on the Opening the Reading Room of the Public Library on Sundays,
1867, Boston, City Document, No. 63.

ボストン市

市議会上院 1867年5月27日

「公立図書館に関する両院合同委員会」に、公立図書館の閲覧室あるいは公立図書館の一部分の日曜開館について、いくつかの請願や抗議が回ってきた。本件について慎重な審議を行い、謹んで以下の報告を提出する。

報告

本委員会の知るところによると、公立図書館の〔日曜〕開館問題の論議は1859年に遡る。この件は住民、新聞、市議会からさまざまな程度の賛意を得た。1つの例を指摘すると、市議会の両院が日曜開館に賛成し、市長の拒否権の行使によってのみ成功しなかった。しかしながら本当のことを述べれば、今では新聞もコミュニティも日曜開館の適切さに関して、完全に同意しているというわけではない。

本委員会の各委員はキリスト教信仰の諸宗派の見解を代表しており、本件を神学論争から取り除こうと努めてきた。また本委員会は、コミュニティの道徳を維持するものとして押しつけられてきた義務感を示すことで、信仰告白者の感情を1人として傷つけたいとは望んでいない。

本委員会の知るところによると、以下のことは習慣であり、便利さは認められている。鉄道馬車が日曜日にボストン市内を走ること。商人用の閲覧室や独立した閲覧室が日曜日の一定の時間帯に開館していること、また〔ボストン〕アセニアム（Athenaeum）の図書館、それにユニオン・クラブ、テンプル・クラブ、サマセット・クラブが日曜日に会員に自由に開かれていること。これらは私的団体で、したがって市の規制に服さないと解答されるかもしれない。それに対しては、それらの利用者は最も実質的な市民、秩序と社会的作法の友であり、多分にボストン市の風格と性格を形成していると解答しておく。

しかし一部の人は、図書館閲覧室の日曜開館——それは請願者の求めである——を許すことで、日曜日の礼拝出席者が少なくなると懸念している。ボストンの人口は約20万人である。当市の110か115の教会が日曜日にすべて埋まったとして、約5万人が精一杯である。実際、ボストン市民の大多数、特に若者は全くと言ってよいほど教会に行かない。そうした若者は下宿屋に住み、週日はあくせく働いている。大多数の人はリクリエーションとして郊外や町を探し、魅力的な行き場がないために、1日をただただと過ごしてしまう。他の国では、田園部への小旅行、植物園、水晶宮（crystal-palaces）、音楽など、慈善家や宗教関係者が好む上品な場所

があり、民衆を日曜日の悪徳や放蕩に近寄らないようにしている。

これらの群衆に平凡で無為の日曜日を過ごさずのと、偉人や善人の思想を示す図書、雑誌、新聞などを精読でき、読者に刺激と向上をもたらす閲覧室開館によって、人びとの心に少しでも利益となる誘因を提供するのでは、どちらが好ましいであろうか。現実的な道德の問題として、どちらがよいかは自明である。本委員会は積極的に、適切な規則の下で、閲覧室を開くのがよいと判断する。

もし市議会が本委員会の決定に賛成したとして、本委員会は公立図書館の正規職員が日曜日にも追加の仕事をするように求めるつもりはない。1人か2人の特別な補助職員を雇用すればよく、そうした職員は期待される良い行いのために責任感を持って、率先して財産の管理と来館者へのサービスを行うであろう。それに図書館自体も日曜開館で何ら妨げられることはない。図書館の特定の図書を調べたい読者は、利用したい旨を週日に伝えておくようにすればよい。そうすると日曜日にその来館者に手渡すために、土曜日に当の図書を閲覧室に置くことができる。こうした方法などで、提案中の住民利用に対するすべての反対に論駁できるだろう。過酷な仕事をしている学習好きで有徳の人へのサービスには、通常以上の利点があるだろう。住民利用や秩序維持、それに礼儀正しい振る舞いについて、本計画では詳細を示してはいない。そうした詳細は、出発の前提——日曜休館を続けて心を悩ませるよりも、開館して心を開明する方がよい——が受け入れられなければ、意味があるとは思われない。

単なる指摘に留めるが、本委員会は図書館理事会と本件について相談した。本委員会の意見は、適切な規則の下で、図書館の閲覧室を日曜開館することが妥当であるというもので、この見解を図書館理事会に伝え、理事会の意見をうかがうと投票で決定した。図書館理事会からの回答も同じように満場一致で、市議会がこの措置を妥当と考えるなら、午後2時から午後10時まで閲覧室の日曜開館に問題はないということであった。本委員会は、図書館理事会の反応が本委員会の見解と軌を一にすると見なしている。

本件についての好意的な見解の下、本委員会は以下のような命令を提示できるのを非常にうれしく思う。そして市議会が賛成することを疑わない。

チャールズ・W.スラック (CHAS. W. SLACK)
トマス・ガフィールド (THOMAS GAFFIELD)
エレミア・L.ニュートン (JEREMIAH L. NEWTON)
アルフォンゾ・パウマン (ALFONSO BOWMAN)
ジョン・F.ジャーヴィス (JOHN F. JARVIS)
トマス・ゴギン (THOMAS GOGIN)
H.バー・克蘭デル (H. BURR CRANDALL)

命令：図書館理事会に対して、毎週日曜日の午後2時から午後10時まで、図書館の閲覧室を一般住民の利用のために、理事会が定める規則の下に開館することを要請する。関係する経費は公立図書館予算につけるものとする。

(4)

主の日にボストン公立図書館を開館するにあたっての抗議あるいは諫言
安息日を覚え、これを聖とせよ

ボストン 1867年6月3日

*Protest or Remonstrance of M. Field Fowler, Against Opening
the Doors of the Public Library, Boston, on the Lord's Day,
Boston, Rockwell and Rollins, 1867.*

M. フィールド・ファウラー

ボストン市議会へ：

主の日 (Lord's Day) に公立図書館の扉を開ける提案に対して、私は謹んで抗議いたします。提案に賛成する「図書館に関する」合同常任委員会の報告〔資料(3)〕を読みました。陰險な論理とは言わなくても、確かに非常に巧みに作成されています。報告に署名された紳士方を高く評価いたします。またその方々の公式の立場上、図書館の問題だけではなく、私たちのコミュニティに広くかつ重要な影響を与える文書となりましょう。しかし、同時にキリスト教の安息日遵守に関してコミュニティを扇動するような問題がいろいろ浮上してまいるでしょう。報告で重点的に扱われている問題もいくつかあります。実際のところ、いま有害な実践や習慣および道徳低下の慣行として、キリスト教のコミュニティが検討している事柄に、その原因があるように思われます。報告によると、委員会の各委員はキリスト教信仰の諸宗派の見解を代表しているとのこと。報告全体について、この仮定や断言以上に「私の気分を傷つけた」ものはありません。ボストンにおけるキリスト教の宗派がこの断言を正しいと認めたり、この報告が前提としている仮定に同意するならば、大いに驚くべきことです。私は全面的に反対です。また教会に対する、あるいは私が所属する宗派への侮辱です。それはボストン市のすべての福音派のキリスト教会の思いだと信じています。

報告によると、「鉄道馬車が日曜日にボストン市内を走ることは習慣であり、便利さは認められている」とのことです。鉄道馬車を利用する人に限ってこれが正しいと認めることは、コミュニティ全体にとって正しくまた有益であるとの証明にはなりません。あるいはキリスト教宗派の見解によって認めたという証明にもなりません。

報告によると、ボストンの約人口20万人のうち、4分の1弱つまり5万人弱しか日曜日に教会に通っていません。さらに、「実際、ボストン市民の大多数、特に若者は全くと言ってよいほど教会に行かない」というのです。これは明らかに、大多数の市民が日曜日に何か非常に悪い「習慣」に耽っていることを認めているのです。鉄道馬車が日曜日にほんの一握りの人びとに利用されるのなら、またそうした人はさきほど言及した階層の人が大半であるのなら、「習慣」は公立図書館の「日曜」開館に賛成という推論を正当化することにはなりません。日曜日に鉄道馬車を走らせることが、ボストン市の過半数のキリスト教徒、または過半数の有権者にさえ容認されているとは思えません。

ボルティモア市では、リベラルなキリスト教牧師が言葉巧みに扇動した最近のボストンの例に習って、2万票のうちほんの1,300票の多数で、日曜日に鉄道馬車を走らす決定をしました。昨年ボストンでは1,072人と2,071頭の馬が雇われ、週日に精一杯働き、さらに日曜日にも働いているのです。ある人にとって「便利さ」は認められているかもしれませんが、そのような「習慣」を擁護し、賛成するようなキリスト者の心は、そのもたらす害毒およびすべてに波及する結果に無知だといえましょう。私はこのような日曜日の「習慣」に対して、公立図書館〔の日曜開館〕問題が始まる3年前、すなわち1856年から経験も観察もしてきました。したがって、その子どもの1人と考えられてもあながち間違いではありません。おそらくそれは非嫡出だと言う人もいようかと思いますが、私は鉄道馬車が問題の母であると思います。その父あるいは父方の創始者については何とも言えませんが。私はその祖父の1人であることに責任を感じております。また、ずっと以前に私の罪を認めてきました。いまはそのような害毒あるいは「習慣」を繁殖させたり、作り出すのを止める時期と感じます。害毒や「習慣」を育成するのではなく、根こそぎ断つことによって止めるのです。

閲覧室の日曜開館について、「コミュニティの道德を維持する者」が為替取引や他の閲覧室およびクラブの例を盾に訴えるだけでは、この古いピューリタンの都市ボストンの市政府の言い分を正当化するには、大変貧弱な主張だと思わざるをえません。もし市長や1名あるいは数名の市会議員が個人的に日曜日に閲覧室を監督して、「図書、雑誌、新聞」を手渡すのであれば、適切とはいえないものの、一応筋がとおっていると思います。

日曜日の鉄道馬車問題に関して、私はボストンの日刊新聞紙で嘲笑的となっています。ではなぜ彼らは日曜日の午後に価値ある新聞を発刊して、「偉人や善人の思想」でもって、読者に「刺激と向上」をもたらさないのでしょうか。そうした人びとは未だに私の質問に答えていません。しかし、おそらく公立図書館の〔日曜〕開館を待っているのでしょうか。「現実的な道德の問題として」、日曜日に公立学校を開くよう請願したい人が、コミュニティに大勢いることは明らかです。そして、公立図書館開館の賛成論よりも、はるかに力強い議論で応援するでしょう。教師は週の6日間、鉄道馬車の車掌や運転手に比べると半分も精力を使っていません。それでいてはるかに給料はよいのです。日曜日にクラブや商人の閲覧室を開く必要性や妥当性があるか疑問です。私は狂信者ではありませんが、〔日曜〕開館が神の律法と合衆国の習慣に適合するとは思いません。ニューヨーク為替取引所 (Merchants' Exchange) は日曜日には開いていません。世界最大のロンドンの為替取引所も同じです。そして玄関には目立つように、「大地とそれが生み出す豊かさは神に属する」と刻まれています。この言葉に私は強い感銘を覚えます。

もし、神の「言葉」として神聖を信じることができるならば、公に神をすべての意味では認めず、とりわけ主の日 (LORD'S DAY)、あるいはクリスチャンの安息日 (CHRISTIAN SABBATH) を聖なるものとして守らないような制度、人、政府は、いずれも神の祝福を期待することはできないのです。それはもともと、時の初めより創造の律法であるだけでなく、創造主の手に由来するがゆえに、身体、知性、そして我われの性質における道德的仕組みを祝福 (BENEDICTION) する行為なのです。十戒の他の掟と同じように、第四の掟はエホ

バによって、モーセ五書（Pentateuch）のように紙ではなく、石板に書かれました。石版は永続性のシンボルです。それはキリストとその使徒がはっきりと認知しています。イエスも使徒たちも、福音は律法を破るのではなく、律法を確立し成就するものと宣言しています。従って、それは「キリストのもとに導く教師」と呼ばれており、我われは「キリストに至る律法の下」ににいるということです。服従の形態は変化するかもしれませんが、美德そのものは変わりません。それゆえ道徳的義務は、族長時代（Patriarchal）、ユダヤ人、それにキリスト教の制度のもとでも原理において同じです。どのような制度の下に人類が置かれようとも、また創造主がどのような条件を定めることがふさわしいと考えようとも、人は決して人の本質を源とする拘束義務から自由になれません。ある制度のもとに神は1つの法律を設定し、それは別の制度の下で神が設定した原則と食い違ふと仮定することは、神の変わらざるご性格に降りかかってきます。それは神性を神ご自身と対極に置き、実質的に神の完全性を否定することになります。ユダヤ人の安息日は、復活の朝、新しい創造として墓からよみがえった救い主とともに、眠りからさまされたのです。そのときは福音の救いという豊かさを伴ってです。またユダヤ人の安息日は、ペンテコステの日、キリストの栄光の冠から聖霊とともに、キリスト者の安息日あるいは「主の日」として、世の終わるまで教会で遵守されるように下ってきたのです。

結論として、私はニューヨーク安息日協会（New York Sabbath Committee）発行のパンフレットが示す、真実にして雄弁な感情をもう一度声にしたいと思います。

聖なる休息の日は、キリストの名前をもつ国および平等の権利を前提とする共和国に対し、最高位の市民的価値を有する。人は聖なる休息の日を必要とする。肉体的にも、労働の汚れをぬぐい去り、1週間の消耗ののち自由に一息つける時期として、また心配による心身の緊張を和らげるときとして、聖なる休息の日を必要とする。人は道徳的にも聖なる休息の日を必要とする。目を奪う世俗性や物質主義から助け出し、靈的な関心、最後の締めくくり、永遠の命を覚えるために、聖なる休息の日を必要とする。労苦も聖なる休息の日を必要とする。休息を分かち合うため、資本の独裁から離れて信心するために、聖なる休息の日を必要とする。また資本も聖なる休息の日を必要とする。獣のようになった人や絶望した人による無軌道や無秩序から資本の蓄積を守るためにも、聖なる休息の日を必要とする。国も聖なる休息の日を必要とする。公的秩序、静謐、徳の守り手として、聖なる休息の日を必要とする。人間の法律は、どんなに形式が優れていても、実行において無力となる。法が良心と永遠性を土台とし、知的な人によって自発的に認められない限り無力になる。神の日は人を豊かにし、私たちに他者のことを思い出させてくれる。特に共和国において、共和国の自由は神の下にある神の徳に付随している。神の至上の権利を——自由かつ信心深く訓練された民が——認識することは、人間の権利構造の維持にとって、道徳的に必須の土台になる。支援がなければ、——国が打ち立てたものとしてではなく、個人的に自由に受け入れられたものとして——宗教からのそのような支援がなければ、すべての人間の自由は最終的に朽ち、崩壊し、戻ることはできない破滅に陥る。

もし市議会が主の日に公立図書館の閲覧室を開けると決断すれば、ニューヨーク安息日協会が最近発行した『安息日（THE SABBATH）：理性、啓示、歴史の観点、文学の概説を添え

て／ジェイムズ・ギルフィラン (JAMES GILFILLAN) 牧師著』を数百冊購入するよう希望します。そして図書館利用者が使用できるよう机の上に置いてください。

M. フィールド・ファウラー (M. FIELD FOWLER)

ボストン 1867年6月3日

(5)

ボストン市立図書館閲覧室の日曜午後の開館に関する論争

(ボストン, 1867年)

*Argument for Opening the Reading Room of the Public Library
of the City of Boston, Boston, A. Williams, 1867*

チャールズ・M・エリス (Charles M. Ellis)

議長ならびに紳士方：

我われの前に提出されている問題は平明かつ単純なことであります。公立図書館に関する合同常任委員会には、公立図書館の閲覧室開館に関してさまざまな請願や抗議がなされていますが、同委員会は「本件について慎重な審議を行い、図書館理事会に対して、日曜日の午後2時から午後10時まで、図書館の閲覧室を一般住民の利用のために、理事会が定める規則の下に開館することを要請するという命令を報告しました」[資料(3)]。それは市議会上院を通過し、今やこの聴聞会の後、貴委員会の報告[資料(6)]があり次第、市議会の行動を待つばかりになっております。

専門の義務を遂行するため、また日曜日の閲覧室開館を主張する市民の権利を維持するため、そして開館が最も必要な時に、閉館の理由として主張されている全事項に答えるため、ここに参っております。皆様のなかには簡単な抗議書をお持ちで、その中には署名がされたものもお見受けいたします。ブレイキー (Blaikie) 氏とそのお仲間は入念に練られた文書を提出されています。その中にはさまざまな神学的な反対などが含まれています。ファウラー (Fowler) 氏の抗議は鉄道と神学的な理由によっています。氏は印刷し、配布する価値ありと考えられました。氏は控えめではありますが、確信をもって、また敬意をもって、キリスト教信仰のさまざまな宗派の宗派的見解が代表されているという貴報告書の主張が、正しくないと言っております。さらに「ボストン市のすべての福音派のキリスト教会」は、「その報告に全面的に反対し、また教会に対する侮辱」とまで断言しています。私は多種多様なまったく首尾一貫しない、矛盾に満ちた、正当化できない理由を提示する、多くの人を知っております。

本件は単純な問題で、図書館と閲覧室を支えるために税金を払っている市民の明白な権利を主張するだけのことです。市民にとって図書を唯一利用できる日曜日の午後と夕方に、閲覧室で本を利用できないのです。それなのに日曜開館は、宗教的な自由を覆す手段、教会と国家を分裂させるくさび、それに教会と国家への不安材料、フランス革命といった名前から連想する

すべての恐怖の前触れだと言われるのです。

そこで我われの前にあるものを、偏見を交えずに簡略に調べ討議しようではありませんか。

安息日、日曜日、主の日という語

上記の語に関して1つの言葉を使用することができます。安息日は我われの土曜日にあたります。その日を守ることに對して、ユダヤ人およびセヴンスデイ・バプテストを除き、宗教的な命令はないと誰もが認識しています。日曜日、ディエス・ソリス（*dies solis*）は週の初めを示す昔の言葉です。「主の日」というのは、次のような人が当てはめた表現です。つまり、キリスト教徒として、ユダヤ人の日を守らず、安息日とは認めないが、1日に安息日と同じような尊厳を与える人びとが普通に使う表現です。

一般的な聴聞会（省略）

証拠の性質

この問題は一般的な考察および巷間に流布された事実にに依拠しています。またその報告は大変うまく表現しているので、私が取った方法以外は時間の浪費以上に悪いように思えます。抗議者は対極の方法を取りました。まず10月まで遅らそうとして、30人以上の証人を呼び、証言と反論をさせようとしたのです。

しかし公平に調査すると、抗議者が請願者「日曜開館の主張者」に向けて提出された意見通りに、本件を動かすことにはならないとわかるでしょう。抗議者は請願「日曜開館の主張」を強化し確認する証拠をたくさん提出する結果になりました。まず30余人の証人の内5人が、閲覧室開館は不便かつ實際的でないと証明するために選ばれました。しかしこれらは、そしてこの種の反対はすべて、「日曜開館は實際的である」という図書館理事会の満場一致の投票で退けられました。

ジュエット氏（[Charles C.] Jewett [1858-1868年まで館長]）の意見も多少影響しているかもしれません。というのは教会の委員だったからです。しかし残り25名以上は、ほぼ全員がバプテスト、メソジスト、エピスコパル、あるいは正統派教会の教会員、あるいは大多数が牧師です。ただ1人ユニヴァーサリストがいましたが、2名の例外はともかく、今日呼ばれた人びとは誰もが前もって知っている人でしたので、どんなに望ましくても日曜開館に反対されるでしょう。この人びとの意見が本件を変更することはありません。そのような意見の存在は、報告の中で十分かつ公正に認識されています。閲覧室が開放されるべきでないと示す証拠を何も述べていないと思います。

神学的な反対（省略）

人びとのニーズと日曜日の閲覧室へのアクセス

ここで記しておいた方がよいのは、ユアート（[William] Ewart [1798-1869; 自由党下院

議員]) 氏と学識ある仲間の報告書が示すいくつかの事柄です [これは英国議会在に1949年にユアートを委員長に設置された「図書館に関する委員会」の報告書を示す]。それは本件の案内や助力として一定の参考になるでしょう。

「英国の大都市において、住民に自由に開かれた図書館設立を拡大する最良の手段について」報告するため、委員会が任命されました。委員会では日曜開館を問う機会はありませんでした。公立図書館の設立の方法を考えればよかったです。

その報告によって明らかになったのは、大陸では公立図書館ができてずいぶん長く経つのに、英国にはマンチェスターのチェタム (Chetham) 図書館を除いて、図書館が全くなかったことです。一方、アメリカには100を超す図書館がありました。したがって本件に英国は参考になりません。しかし入念で徹底的な調査で收拾した情報を使用できます。この調査では、フランスやベルギーの首相のギゾー (Guizot [1787-1874])、ファン・ドゥ・ヴェイヤー (Van de Weyer [1802-1874]) などの助けがあり、文明世界の図書館や国のほとんどから詳細な回答がありました。

最初に指摘すべきは、学習、図書、読書は、道徳、秩序、および宗教を向上させるということが、文明化したキリスト教世界の共通な証言で、異議がないという点です。それは明白な事実なので、人名を記す口実はありませんが、発言の概略は問題にされてきました。ある人は「知識は道徳を犠牲にして求めるべきではない」と主張します。法律がチェックできないような「犬闘や闘鶏」、「いい加減」、「男女いっしょのクラブ」は、学習、図書、読書の影響で次第に姿を消すでしょう。

次に、アメリカで主張されているような反論はないことが分かりました。無料の画廊、美術館、デザインスクールが提案されたとき、「それらは適切でないし乱用されるかもしれない」と言われたりしました。しかし「大英博物館、ハンプトン (Hampton) の美術館、国立美術館が開館した。乱用はなく、開館後には理性的な楽しみや民衆の知的向上が見られた」と続いています。

さらに、代表的な宣教師がアメリカにきて、閲覧室に反対し、フランクリン・ホール (Franklin Hall) の科学図書館は使用されておらず、ある階層の読むものは『サンデー・ヘラルド』であると話しました。多くの話の要旨は、閲覧室利用者は特に「悪に向かう傾向があり」、そのような人びとの証言によって、我われの信仰を強化し、常識さえ正当化しようとするものでした。そうした人の証言によると、人は「文人と同じほど深く高級な文学の美を享受し感じることができる。また劇場で文人が賞賛するのと同じ台詞を賞賛できる」、「すぐれた本を読めば、劣った図書よりも良書を好むようになる」というわけです。

ブーローニュ (BOULOGNE, 省略)

ベルギー (BELGIUM, 省略)

イングランド (ENGLAND, 省略)

ボストンとアメリカにおけるニーズ

ジュエット氏によると、この図書館では1,800冊の図書が土曜日に貸出され、他の日には600冊に過ぎないとのことです。この数字はボストンでのニーズを示す、れっきとした証拠になります。

<中略>英国議会の調査〔1849年〕でアメリカ人の証言者が、我われの工場図書館、ローウェル改善サークル（Lowell Improvement Circle）、『オファリング』（The Offering）〔ローウェルの町の女工による文芸雑誌〕の証言を行い、感銘を与えました。ヘンリー・スティーヴンス氏（Henry Stevens〔1819-1886; アメリカ生まれでのちに大英博物館につとめた書誌学者〕）は「読み書きができない8歳以上のアメリカ生まれの人を見たことがない」、一方ドーソン（Dawson〔1821-1876; 英国の牧師で無償教育などの主張者〕）氏は「読み書きができない人は英国に800万人以上いる」と述べました。さらに英国国教会ソサイエティがノーフォークにある400人の教区を取り上げ、読み書きができる人は1人もおらず、教区の書記は女性であったと記しました。私たちは、ニューイングランドで、手に入る本が読めない家族がいる家庭はほとんどないことを知っています。すなわち我われはもっと幅広く無料で提供する図書の必要性を感じているのです。

<中略>

6日間の12時間労働。図書館へやってくる労働者やビジネスマンの労苦。そのためこうした人は絶対に図書館を訪問できないのです。M.フィールド・ファウラーやピーター・T.ホーマー（Peter T. Homer）に鉄道馬車を止めさせ、自然の力で走る馬車を止めさせて、人や動物の仕事をはほとんど使わずに神学を教えてもらいましょうか。そして『チャーチ・マンズリー』（The Church Monthly）だけを読むように命令させましょうか。言っておきますが、ファウラー氏たちは鉄道会社の公正な取引に従事し、従業員にもう少し多くの余暇と日曜日を与えた方がいいと思います。ここにおられる方々はこういった人ですか。コミュニティの大多数の人の唯一の時間を、時間が重くのしかかる人に譲り渡すよう要求する拘束力とはいったい何で、その目的は何ですか。自分たちは他の曜日に読書時間がたっぷりあるからといって、本のために割ける僅かな時間をあきらめさせようとするのはどうしてですか。宗教的信条をあなた方の信条に合わせるよう求めるのはどうしてですか。労働者の感情を傷つけてはいけません。問題は我われではなく、彼らの感情にあるのです。どうして1人の怠惰な、神経質な人が家族全体を黙らせたり、煩わせたりしなければならないのですか。そのような人は仕事をさせ、外へ出て感覚を癒す方が好ましいでしょう。本件は1人の陪審員が賛成し、11人が反対しているという事例に相当します。誰が折れるべきでしょうか。スコットランドのことわざを思い出してください。「足がぬれるからといって、小川をせき止めてはいけない」。

ホーマー氏はロンドンの道徳的な好例を証拠として挙げられました。1854年、特別委員会が国立施設の日曜開館を勧告しました。1855年と1856年に、大英博物館と国立美術館の開館が提案されました。1863年には日曜日の礼拝後、ダブリンの科学施設の開館を報告しました。

1866年と1867年には、日曜日の夕方ロンドンで有名な科学の講座が開かれました。

1人の人間が、〔日曜日にボストン〕アセニアムの閲覧室で41のアメリカの定期刊行物と66

の外国の定期刊行物を利用したり、自分自身の批評を読んだりすることと、同じ日曜日に貧しい人や多忙な人が200種もの定期刊行物を利用するのを阻止することは、矛盾しないことなのでしょうか。

日曜開館しているヨーロッパの他の図書館

ジュエット氏はこの20年間の日曜開館を示す事実を知る資料を提供していません。しかし氏が指摘したベルギーの大きな図書館に加えて、次のような図書館が日曜開館していたと思われます。スイスのベルンやチューリヒの町の図書館、およびイタリアのいくつかの図書館です。人口2万人のベルンの図書館は2万冊、人口12,000人のチューリヒの図書館は1万冊でした。

アメリカで日曜開館している図書館

ジュエット氏が触れた他の資料で、私は偶然に次のことを知りました。ボストンのアセニウム（Athenaeum）やクラブの閲覧室に加えて、3つの職工徒弟協会およびシンシナチのオハイオ職工学校は、日曜日に日の出から日の入りまで開館しています。オハイオ職工学校は建設費32,000ドルで、3,265冊の蔵書があります。日曜閉館の多くの図書館も日曜日の読書要求を満たすために、土曜日の夕刻に開いているのです。例えばミドルセックス（Middlesex）職工協会、ナンタケット（Nantucket）・アセニウム、ニューポートの職工学校、ニューヨーク・ソサイエティ（New York Society）、その他です。

閲覧室の特徴と閲覧室利用の全般的必要性

閲覧室は（新聞は含めないで）約200種の定期刊行物があり、あらゆる主要宗派の指導的雑誌を揃えている——カトリック、エписコパル、メソディスト、トリニタリアンとユニテリアン、カルヴィン派とユニヴァーサリスト、バプテストとスウェーデンボルグ教会、その他です。そうした指導的雑誌は、科学と文学、あらゆる社会的、道徳的、慈善的な問題、病院や軍隊の行い、労働問題、雇用、世界での慈善を扱っており——キリスト教実践のあらゆる側面を取り上げています。また閲覧室には他所にはないような、大きな参考蔵書があります。

これらの科学、社会、道徳、宗教の雑誌によって、教会、宗派、人類について重要な事実や現実の問題を学ぶことができますし、キリスト教徒や人間としての義務を理解、準備、実行できます。日刊新聞によって出来事を知り、日々の問題を理解できます。政治雑誌によって政党や国の問題や行いを知ることができるのです。しかし日刊新聞や政治雑誌は、科学、社会、道徳、宗教の雑誌ほど必要ではありません。1つの例だけを指摘しておきます。続きの部屋で兵士の記念碑を意図した美しい絵画を見ていたとき、私は刻板の1つに、陸軍衛生病院部隊の仕事を象徴するグループが描かれているのに気づきました。誰もが理解するでしょうが、これだけで戦時中に研究が必要な素材を非常に多く示しているのです。

明白なことですが、管理者はどの部門でも、資金と施設が許す限り、完全な閲覧室を目指します。そのことによって誰もが閲覧室で、文献が供する知識や宗教への助けを見つけ出し、利用できるのです。直近の国勢調査によると、全国に277種の宗教関係雑誌、298種の文学関係雑

誌がありました。宗教関係の季刊誌は14種、年報は6種、文学関係の季刊誌12種、年報3種（すべてが多かれ少なかれ宗教の題目を論じている）です——すべてで35種となります。そして政治関係の年刊1種と季刊誌2種は、確かにこの4年間は宗教関係の事柄も取り上げてきました。自明のことですが、誰ひとりとしてそうした雑誌をすべて買わないし、買えもしないのです。民衆は1種たりとも購入できません。しかし、時代、道徳、社会、宗教の問題について広範な研究をしようとするれば、また自分の宗派のそうした問題を理解しようとする場合でさえ、これらの雑誌が欠かせないのです。それに、これらの雑誌が閲覧室から持ち出せないのも明白なことです。多くの人は週日の図書館開館時間は仕事をしており、日曜午後に閲覧室が閉じていれば、人間、市民、キリスト教徒として最も必要とする全資料を利用できないのです。多くの人はこの唯一の立派な図書館からあまりにも離れて住んでいるので、少しでも使えるようにするには日曜開館しかありません。

日曜開館に影響を与える人の全般的特徴

日曜開館問題がいかに深くても、これは単純な問題、単なる権利の問題であり、事実、信仰、時代状況を視野に入れて検討されるべきです。貴委員会報告は次の事実を示しています。大都市ボストンには115の教会があるものの、住民の4分の1しか収容できません——バプテスト、エписコパル、メソディスト・エписコパル、カトリックが各々12から14の教会、ユニテリアンが約20、メソディスト、再臨派（Second Advent）、ユダヤ教、ユニヴァーサリストが各々3つか4つ、それにスウェーデンボルグ派、およびその他です。また、「実際、ボストン市民の大多数、特に若者は全くと言ってよいほど教会に行きません。そうした若者は下宿屋に住み、週日はあくせく働いている」ということです。こうした委員会報告が示す事実に加えて、忘れてはならない人たちがいます。私たちは迷信深く、無知で、教育のない人間ではなく、道徳的、知的で、信仰深い人間です。また儀式的、思索的ではなく、熱心、敬虔、それに現実的です。信仰の証拠と目的として仕事を重視しています。市民的、政治的、宗教的な自由に関する法を認めているのです。もっともそうした法律は忠実に適用されておらず、幾度も違反され、支配を許すという点では躊躇します。それでも依然として北極星として視野に留まっているのです。本件について言えば、日曜日に閲覧室を閉じるべきでしょうか——この問題は社会、州、教会の関心事であるが、各人の個人的な権利と善に関する1つの問題として、解決されるのがよいのです。すなわち、閲覧室の利用希望者にとって何が最善かということです。

日曜日に閲覧室を閉じることは、知的、道徳的、宗教的な向上にとって必須のものを、男女から妨げてしまうことになります。この理由のために、日曜閉館のあらゆる主張は却下されるべきです。

安息日問題は必ずしも関係しない

したがっていわゆる安息日問題は、必ずしも本件に関係するわけではありません。神あるいは人、市民的あるいは宗教的、日曜あるいは主の日など、権威が何であれ、閲覧室の利用が人間の精神的な善のためであるなら、安息日にとっても、日曜あるいは主の日にとっても善であ

るのです。

娯楽問題は生じない

日曜日の利用と娯楽という問題も、論議の理由とはなりません。というのは日曜開館は、平和と静けさ、学習と思考をもたらす傾向にあるからです。日曜開館は宗教という制度に敵対するのではなく、支援します。ですから、マニング博士 (Dr. Manning [Jacob M. Manning, Old South Church牧師(1872-1882); Congregationalist-Trinitarian]) の主張の1つは却下されます。すなわち同博士の立場は、安息日と図書館の活用法において、日曜開館は特定の宗派の利用法だということです。

日曜日の閲覧室利用は、当然かつ必然的にいわゆる遊興をすべて少なくするでしょう。決して遊興の導入や拡大になりません。また法律や法的有効性への違反という問題も生じません。なぜなら、通常の職業での労働を行ったり、求めたりする権利の問題ではないし、新たな公費抛出や実質的な公費支出という問題でもないからです。

請願者は宗教および法律の利益や履行を拡大し支援するために、閲覧室の利用を求めています。

さらに、マニング博士は、明らかに日曜日が安息日でないことを知っておられます。また同博士が奉仕する宗派は権威を持って、日曜日が安息日であること、あるいはそれがユダヤ人に由来することを否定されるのです。

自由についての法：マニング博士の主張は抗議者を非難している

ここで他のマニング博士の主張を処理しておきます。私が示すのは閲覧室の利用は人間の権利であって、宗教と人間性の最高位の利益を進展させるために行使されるということです。また閲覧室の利用は特別にして特異な利用ではなく、最も神聖な施設の目的や施設への影響の点では、何ら敵対的、異質で、偏見的でもありません。さらに閲覧室の利用は道徳やキリスト教に最善の影響をもたらします。しかしここではマニング博士の立場、すなわちボストン市が閲覧室の利用を許せば、日曜日についての特定の思想を宣伝することになり、したがって図書館をセクト化するという論を取り上げます。この考えは、マニング博士がいうように「仮定」であって、「根拠がなく、正当化できません」。

単純な真実は、マニング博士が求めるように実行することは、セクト的な目的のために実施することになります。自分自身の意見に服従しないなら、そうした人びとが本来有している特権を排除するということです。

<中略>

ユダヤ人が真の安息日である土曜日、すなわちプロテスタントやピューリタンの半休日 (half-holiday) に図書館を閉めるなら、自分の信条のために図書館をセクト化したということにならないのでしょうか。

すべての人が図書館を賄っています。すべての人に、自分が利用できるときに利用する機会を与えるべきです。そして利用に際しては、自由、公平、平等でなくてはなりません。他者の

信仰や嗜好に従って、特定の日や季節に誰かを禁止することは、そのような嗜好や信仰の基準を他者に強いることになります。

マニング博士の主張は、巧妙さや技術的な点でも何ら補強されてはいません。単に開館しないことを求めているだけなのです。閲覧室の開館は公共財産と公費の支出です。もし閲覧室の利用があらゆる人の権利だとすれば、この権利は実質化されていないことになります。それに実質的あるいは物質的な支出も必要としません。新たな利用が提起されてもいません。示されるべき事柄は、閲覧室を利用したい人がいるのに、どのような道徳的あるいは法律的権利によって、そうした人を閉め出すことができるのかという点なのです。貧しい男女は本を購入できないし、1週間まるまる働くことを強いられています。そうした人びとは日曜日の午後に閲覧室にやって来ます。そして閉じられていることを知るのでした。マニング氏やその同僚が扉の前で防いでいるのです。人びとは、マニング氏が自分たちの検討している主題を論じているのを聞きました。また自分たちの考えどおりに進むことを願っています。人びとはマニング氏に使用を求めないし、要求もせず、邪魔もしません。どのような理由でマニング氏は人びとを排除するのでしょうか。確かに、マニング氏は自分の信仰にとっての利益から実施しているだけです。マニング氏は図書館を自分の思想の宣伝に使い、公立図書館をセクト化することで、宗教的自由およびキリスト教的寛容の精神に違反しているのです。

もしある人の信条や理論から、一定の日の断食、一定の肉食の禁止、一定の形式の遵守、一定の服装の回避が最善であるとします。その場合、すべての人に断食、市場からの肉の排除、一定の形式の要求、一定の服装の禁止を強いることを強制できないではありませんか。

<中略>

さらに週のいかなる日、週の最初の日である日曜日、すべての人が主の日として遵守することに同意している日曜日の過ごし方について、そうした日の最善の使用に同意があり、神聖に保つという願いがあり、最高度の宗教および敬虔な行いに専心したいという希望があります。人を問わず、信条や嗜好を問わず、信仰の事柄か形式への愛着かを問わず、服装、儀式、遵守、礼拝への出席を問わず、読書の有無を問わず、行動を問わず、マニング氏の意見を強いる試みは、自由の法に違反します。

何らかの宗教的な行為あるいは感情が、日曜日に最愛の死者の墓参に導き、そこで献花し、厳粛な思いに浸る場合、墓地を閉じて、単に腕を組んで、墓地を開くつもりはないと、人びとを押しとどめることはできないではありませんか。

いまや「ボストン」コモン（Common）はセクト化されているのでしょうか。コモンの使用はセクト主義の宣伝になっているのでしょうか。宗教あるいは政策の観点から、誰かがコモンの開園は最善ではなく、自分たちの感情を害するとの理由で、コモンを閉じ、その使用をすべての人に禁止すれば、その措置はセクト主義の立法にして公共財産の不条理きわまりない使用例にならないのでしょうか。コモンは、歩くのも留まるのも自由です。しかし警官が秩序を守り、乱暴や混乱がないように干渉するのは、セクト主義なのでしょうか。オールド・サウス教会への道だけを開いて他の道を閉じるのは、キリスト教の自由であるのでしょうか。

昔イングランドの町か市か機関が購入した聖書、すなわち黄金よりも貴重な古いパーチメン

トで覆われた手書きの聖書があり、留め金と鎖で繋がれているとします。この聖書を持つ図書館が、日曜日だけ所定の机で閲覧が可能というのと、すべての日に自由に閲覧が可能というのでは、どちらが自由でリベラルでしょうか。何らかの信条や習慣のために、週の最初の日か、日曜日以外のいずれかの曜日だけに閲覧を限るのはセクト主義でしょうか。またそうした措置が講じられると、あなたは何と呼ぶでしょうか。

他の事柄でも同じです。しかしこの事柄をさらに証明する必要はないでしょう。日曜開館の請願者は自由の法によって権利を要求しています。抗議者は、自分たちの特別の考えを執行する法規を求めているのです。宣伝者であり、セクト主義の束縛を築こうとしているのは抗議者です。

ところで、この論争から離れたところにおり、中立的な人に決定させましょう。ジョン・スチュアート・ミル (John Stuart Mill [1773-1836] , ティクナー・アンド・フィールズ (Ticknor and Fields) 版『自由論』の173ページ) は「個人のまっとうな自由へのいま1つの不当な干渉の例として、安息日厳守の立法がある」と述べています。そののち休息の利点について、安息日は「ユダヤ人を除いて誰をも宗教的に拘束するものではない」と記しています。
<以下略>

宗教および道德の利益が日曜開館を必要とする

日曜日夕刻に閲覧室を開館すべき積極的理由に戻りたいと思います。報告では完全かつ力強く理由が示されており、もちろんその部分については省略します。ここでは少数の他の理由を提示することにします。

全体を支配する主たる理由は、それがもし正しいなら、マニング博士の主張の他の部分にたいする完全な解答になるでしょうし、一考の価値あるすべての反対論を却下することになります。日曜日の夕刻の閲覧室利用は、多くの場合、非常に多くの場合に必要です。そして閲覧室の利用を求める個人、それに人びとにとって最高度の道德、宗教、精神的な善を確立し促進するのに役立ちます。ジョン・スチュアート・ミルが1867年1月の英国議会で主張したように、「宗教上の利益について述べれば、コミュニティの大多数の民衆にとって唯一の余暇の日に、教会だけを開くのは望ましくありません」。そしてミルはいっそう広範な法案を望んだのです。ジョン・ブライト (John Bright [1811-1889; 穀物法撤廃などに尽くした政治家]) は調査を求め、「労働者は6日間働き、1日が休息、礼拝、リクリエーションである」と述べました。そして「ここから国に何らかの益が出てくるだろう」と考えました。これは、すべての信条のすべての善き真実の人が同意すべき事柄の1つです。

もしすべてのユダヤ人が法を字義通り厳格に守れば、石の祭壇にいけにえを献げ、子羊を殺して血をまき散らし、火もおこさず、収穫も落ち穂拾いもしないことになります。そして安息日という制度は、休息の日、捕囚からの解放の記念、聖別化と神聖さのために活用されることと分かるでしょう。また字義通りの命令は安息日をもっぱらこの方向に使うことを求めているとなるでしょう。もし、どのように安息日を神聖化するのか、「主への聖化」とは何なのかを問えば、肉体労働の禁止とともに、最も積極的にして最大の自由、最高位の自己修養、それに

人間の善のための最も広範な労働といった積極的な指令を知るでありましょう。人は神聖になり、努力して己の心と魂を純化、拡大、神聖化するだけでなく、祭りや歓喜のときには「貧者に一部分を送る」のです。そして貧者を覚え、「貧しい者が国から絶えることはないであろうから、・・・貧しい者に、必ずあなたの手を開かなければならない」のです。「あなたの羊の群れと打ち場〔打穀場〕と酒ぶねのうちから取って、彼にあてがってやらなければならない。あなたの神、主があなたに祝福として与えられたものを、彼に与えなければならない」（申命記15: 14）というわけです。ユダヤ人は安息日を宗教的諸目的のためだけでなく、宗教教育と学習のために取り置きました。最も厳格な人が最もリベラルな精神的信条者、すなわち形式と儀式から解放されたキリスト教徒と手を携えなければなりません。また絶対的にして不変の法を達成せねばならず、教訓や例によって良き行いをするように命令され、その日を自分や全人類に最高の善を行うため、人のために作られた日を活用しなければならないのです。人間の良心の指図や要求に従って、自分の魂を浄めるためならどのようなことを行ってもよいのです。これはすべての人が同意するでしょう。知識の貯蔵庫を閉ざしてしまえば、葡萄酒や油を与えることができません。礼拝や仕事のために心が浄められ、拡大され、刺激される手段を否定すれば、人を教会や講演会に出席させようと強制しても失敗するのです。

まちがいなく、すべての宗教が以下のことを求める理由に同意しています。「貧者」に施しをすること、「貧者に広く」手を差し伸べること、神が祝福した貧者に寛大に提供すること、とりわけ現在と過去の賢者や善人の知的、精神的な労働の産物という貯蔵庫を開くことです。

知的生産物への自然権

エマソン（Emerson [1803-1882]）はソロー（Thoreau [1817-1862]）について語っています。ソローは図書を入手するために、ウォルデン（Walden）からケンブリッジ・カレッジ図書館〔ハーヴァード・カレッジ図書館〕に出向きました。図書館員が利用を拒否したので、学長のもとに行きました。学長は規則を説明し、一定の距離内に居住する同窓生だけに図書を貸していると述べたのです。しかしソローは最後の拠り所を持っていました。知的、精神的な財で構成される絶対に正しいコミュニティがあり、そうしたコミュニティはこの世界で不滅だということです。そして当の図書はソローのために保存され、ソローのものであり、より多くの利用を求め、ソローが運べるだけの図書とともにソローの家に行く、すなわちソローは永遠の特権を主張したのです。そうした権利に加えて、日曜開館の請願者はソローに比べると劣りますが、それでもボストン市の市民および納税者としての絶対的な権利を持っているのです。

ローマ法（省略）

中国（省略）

エジプト（省略）

日曜日の図書館利用は最古の最善の習慣と一致する（省略）

マニング博士はセオドア・パーカー（Theodore Parker）に頼るべきではない（省略）

都市の図書館を日曜開館する特別の必要性

しかしながら、自明な立場をさらに議論し証明することはせず、日曜開館がボストンのような都市で特別の必要性があるということだけを加えておきます。日曜開館にコストはかからず、誰の邪魔にもなりません。村落部の場合、しばしば日曜日は便利のために図書館の日 (library-day) になっています。日曜学校は便利のために常に日曜日に開かれています。その場合、少々^{少々}の労働が必要なことを示唆されたりしますが、それは取るに足りませんし、決して真実でもありません。寺男の仕事が必要ということで、教会を閉じるでありましょうか。警官は図書館で静かに本を読んでいる人よりも、路上を速歩で歩く馬や通行人を監視している方が、よりよいサービスを行っていることにならないでしょうか。村落では他の要因が作用します。人間は「自然という、言葉で言い表せないほどの純真さと施し物」に囲まれています。永遠に開かれた書物のまっただ中におり、そこから魂は創造と同じほど古い言語で書かれた教えを読み解かねばなりません。人びとは自然の平和、美、よき影響から離れて、都市の騒音、混乱、罪に移って行きます。しかし都市には、村落に残したことを補償する影響が隠されているのです。神の手で造られた都市の外界の現象が、「祈りと賛美の不完全な礼拝を超える交わり」に、文字通り「熱心」な魂に話しかけるなら、また人間の心や魂が外界よりもいっそう優れており、いっそう生き生きしているなら、より高潔で神聖な影響から、公立図書館を閉め出すのでしょうか。むしろ宗教と人間性の利益から、公立図書館の日曜開館を実施し、自由に「偉大な精神の謁見室、平和への聖なる場」に入るように勤めるべきではないでしょうか。

日曜日の図書館利用は必須である

これまで次のことを示してきました。日曜の夕刻に図書館閲覧室の利用を禁じることは、住民の権利に違反し、住民の市民的、宗教的な自由を剥奪するということです。(濫用の防止に必要な規則を備えて) 閲覧室を利用することは、宗教の大義に真に奉仕します。日曜開館は、最も厳格な宗派の公式文書が命じ、またあらゆる信条の生命線である精神が求める類のもです。ここで私たちは思案し、請願者の主張する正当な特権を、日曜開館の命令を採択することで、請願者に確保しなくてはならないと決定できましょう。

日曜開館の要求：労働者の主張

本件の場合、明らかに日曜開館を求める積極的な要求、広範な主張、それに必要性があります。貴報告が記す事実は若い労働者が証明しています。多くの若い労働者が公立図書館を訪れて、自分たちの権利をたずねます。マイナー (Dr. Miner [1814-1895, 牧師Universalist]) 博士などに効果的な問いかけをする人がおり、マイナー博士などは答えなかったし、答えられないし、誰も答えられません。その問いとは以下のようです。「私は生活の糧を得るために、図書館の開館時間に毎週働かねばならない。どのようにすれば私どもは閲覧室利用の特権を行使できるのか、お教えいただきたい。日曜が休館なら、図書を利用できない」。「仕事や家庭の用事がない唯一の時間に図書館が閉まっているなら、どのようにすれば禁帯出図書を利用できるのか、お教えいただきたい」。

最も多い人

若い男女やそれほど若くはない男女の数は、多いのでしょうか少ないのでしょうか。貴報告によると事実として、すべての教会が収容できるのはボストンの人口の4分の1にも達しないということです。すなわち20万人の内の5万人弱が収容できる人数です。この数値を否定する牧師もいます。しかしメソディストーエピスコパル教会は出エジプト記第20章に依拠して長文の「日曜開館」反対声明を提出しましたが、同教会のアパム（Upham）牧師は委員会の数値を正しいとしています。というのはメソディストーエピスコパル教会の数は12で、各教会には500名の教会員しかいないからです。そして多くの教会の規模ははるかに小さく、ボストン市のすべての教会の数は、貴委員会が示した数よりも少ないかもしれません。牧師は礼拝出席者が非常に少ないことを十分に知っています。午後になると、その数が0に近くなることはよく知られています。すべての教会員、ボストンの人口の4分の1、その4分の1の内の日曜礼拝に参加する4分の1〔16分の1〕、その16分の1の内の夕拝に参加する2分の1〔32分の1〕、すなわち人口の多くても4分の1、少なければ32分の1が、日曜開館の特権を使用したくなく、積極的に他者の利用を禁止させようとしています、その主張には効果がありません。問題は、他の4分の3の人、32名の内の30名、圧倒的多数の人びとが、日曜開館を期待していないのか、必要としていないのかという点にあるのです。日曜開館は住民の圧倒的多数にとって必要であり、多くの人にとって必需であります。それに知識への道を開き、知性への道のりを整え、人びとに図書を提供することは欠かせないことです。正統派の牧師を代表するパーキンズ牧師〔H.K.W.〕 Perkins〔Congregationalist-Trinitarian〕は、この3年間にわたってコモン（Common）で毎日曜日に1,000部から1,500部のトラクトを配っておられます。パーキンズ牧師が述べるように、そうしたトラクトは受け取られ、熱心に読まれており、人びとが知識や読書に飢え、熱望していることを示しています。当初、パーキンズ牧師は日曜午後に閲覧室を開くことについて、トラクト配布と同じように作用し、したがって善なる行いと考えておられました。しかしパーキンズが蔵書を調べてみると、そこには科学や文学の作品、あらゆる社会的、道徳的な問題を扱う作品、13種の宗教関係の季刊誌、その他多くの宗教を扱う作品がありました。それとともに、『アトランティック』、『ハーバース・マンズリー』、『ハーバース・ウィークリー』、『パンチ』、『ロンドン・イラストレイティッド・タイムズ』、『イラストレイティッド・ニュース』なども発見し、人びとがこれらの雑誌を読むだろうと確信したのです。そこでパーキンズ牧師は閲覧室の「日曜」開館反対を考えました。原則において、目的において、また週日には良いのだが、人びとが200種〔の雑誌〕から上記6点を選ぶだろうから、日曜は悪いというわけです。そこで一時的にですがパーキンズ牧師は、新鮮な牧草地と純粋な泉のかんぬきを閉じ、人びとが自分の手からパンくずを取り上げ、コップから一口飲めるようにと考えました。そして日曜開館問題にふたをすることを求めました。その理由は、アガシ（Agassiz〔1807-1873; 博物学者〕）から科学の偉大な真実を学べる、ロングフェロー（Longfellow〔1807-1882; 詩人〕）、ローウェル（Lowell〔1819-1891; 詩人〕）、ウィットィアー（Whittier〔1807-1892; 詩人〕）で賛美歌集の事柄を読める、ストウ夫人（Stowe〔1811-1896; 小説家、奴隷廃止論者〕）の実践的宗教か

ら教訓を学べる、ヘイル (Hale [1822-1909; 聖職者、小説家])、ホームズ (Holmes [1809-1914; 医者、詩人])、サムナー (Sumner [1811-1874; 急進的社会改革論者]) などを読むこともできるというものでした。もっと簡単で理にかなった方法は、6種の雑誌を取り除けばよかったのではないかと思います。パーキンズ牧師は正統派教会の代表的牧師ですが、そののち考えを変えました。『パンチ』の挿絵は説教者の役割を果たす可能性があり、紙面では十分に人間性が追求されており、「シャツの歌」(The Song of the Shirts) はパーキンズ牧師のトラクトと同じ価値があるといわないまでも、よく似た価値を有しているというわけです。マイナー博士は労働者を自称していますが、若い労働者に図書館で「週日に本を入手」するようにと突き放したように話しました。そのとき、マイナー博士は以下の嘆きを聞く方がよかったと思います。

仕事、仕事、仕事、
雄鶏がよそよそしく鳴いているあいだに。
そして仕事、仕事、仕事、
空に星が輝くまで。

仕事、仕事、仕事
うんざりする鐘から鐘まで
仕事、仕事、仕事
服役者の作業のように

「週日に本を入手せよですって。私は妻と子どもの日々の生活の糧を得るために、貧弱な身体を消耗させています。そして毎週、次のように祈っています。

『神様、パンはあまりに高価で、
血と肉はあまりに安価であります』

あなたは宗教の名を借りて、祝された日を使う権利を否定しますか。私は1年に7週以上、私の心と魂を休め、新鮮にし、拡大する日を持っています。それは私の良心が強く求め、命じるとともに、私は神に答えなくてはならないのです」。お腹が一杯の人には、飢餓が何たるか理解しようもありません。

日曜開館反対の主張は、健全でも真面目でもありません。開館に反対する真の理由は、開館によって人びとが自分でものを考え、読書し、これまでのように人びとを働かすことができなくなるからです。そのため知識と真実の殿堂を閉じなければならず、そうすればパーキンズ牧師はトラクトを普及できるのです。いったいどのような権利で、パーキンズ牧師はこの3年間報酬のために働き、他の人はそうしてはいけなんでしょうか。他の人ができないような、どのような高位の善を行っているというのでしょうか。他の信条やいっそう高位の信条を持つと

考える人に対して、どうしてパーキンズ牧師は自分の信条を押しつけるのでしょうか。挿絵入りの作品に反対しつつ、自分のトラクトには号毎に挿絵を入れているではないですか。また世界で本当に力を有する作品に反対しつつ、自分の小さなトラクトを読むというわけです。この聴聞の部屋ではそのおかしさに笑いの渦が起きました。そうしたトラクトは良きものでありましょうが、パーキンズ牧師が大した手間もかけないで人びとに提供できる事柄に比べると、アザミの冠毛のように軽く、空中に舞うゴミほど軽いのです。求められているのは心の糧です。宗教の衰退、教会に対する人びとの無関心については、大きな問題になっています。その原因は何なのでしょう。1つの原因として、牧師が世界についての宗教的信念を十分に表明しておらず、また最も神聖な仕事を不十分にしか行っていないということがあります。牧師は従来ほど聖職者の務めを果たしていないのではないのでしょうか。人びとは愚か者の話を聞くために、なぜ敬虔深く座っている必要があるのでしょうか。本当の罪で悩まされてもいない人に、どうして従わなければならないのでしょうか。チャドバンド牧師（Chadband [ディケンズの小説にでてくる偽善的な聖職者]）の風刺なののでしょうか。あるいは、誰もが一定の善を行っているので、救い主の仕事をもっと誠実にやっている人は、あなたのような事業を奨励しなくてもよいというのでしょうか。以上のように、私は日曜開館を主張する人の理由について、市民および宗教的な権利、それにキリスト教徒の義務という観点から、日曜開館ではなく、すべての人に無料で日曜開館すべきことを示しました。そして日曜開館への反対者を検討するなら、ほんの少数の反対者しかいないことがわかるであります。

反対者はほんの少数で、最善の人や民衆は日曜開館を求めている

115の教会のうち、ほんの5つ6つの教会、それに少数の牧師が日曜開館に反対しているにすぎません。ボストンの宗教的と自称するごく少数部分が反対しているだけです。そしてほぼ例外なく、純粋に神学的見地から日曜開館に反対しています。しかしいかなる原理を土台にして、市民の20分の1が己の信仰によって全体を拘束できると主張できるのでしょうか。宗派の4分の1、それも最大の宗派でない4分の1が全体を支配するのです。ところで真実は「現代はリベラルな信仰者の掌中にある」という点にあります。市民の圧倒的多数派の信条によると、日曜開館はコミュニティに積極的な善をもたらします。貴報告は、日曜開館を真に表明し、多種多様な宗派の代表者、反対派牧師よりも状況を把握している人、いっそう適正な審判者が、公正に組立てたものです。貴報告が示した事柄に加えて、日曜開館を支持する他の証拠があります。正統派の牧師を代表するパーキンズ氏の証言は、私宛ての手紙で考えを修正されましたが、その手紙は次のようになっています。「各学区とは言わないまでも、少なくとも各区（ward）に部屋〔閲覧室〕を開くべきである。そこでは不幸にも静かな家庭の結びつきができない人に、静かな社交的な影響も添えて、魂を鼓舞する良書を手にすることになる」。長年にわたって20を越えるユニテリアン教会を代表するサージェント牧師（[John T.] Sargent [1807-1877; 貧民救済、奴隷廃止論者、Congregationalist-Unitarian]）はボストンに住み、日曜開館に非常に熱心です。ヘイル牧師（[Edward Everett] Hale [1822-1909; 作家、Congregationalist-Unitarian]）はボストン市の最も人口密度が高い地区に住み、その積極的

な活動は閲覧室の「日曜」開館を求めている人の欲求を、誰よりも実際に見て、理解しているでありましょう。私の理解する限り、そうしたヘイル牧師は日曜開館支持を公に発表しています。また技術学校 (Technological Institute) の教授で、『マサチューセッツ・ティーチャーズ』の編集長アトキンソン (Atkinson) は、7月号の同誌上で「1つの図書館と閲覧室の日曜開館に反対する代わりに、もし私たちが力を持つなら、市の各区 (ward) に1つずつ閲覧室を開きたい」と述べています。副館長ケイペン (Capen) も筆を執り、「日曜開館を強く支持する。日曜夕刻の開館には最も差し迫った必要性がある。そして日曜開館には教会を開くのと同じように、何の危険も困難もない」と記しています。ジュエット氏によると、閲覧室には道徳的に好ましい影響があります。マイナー (Miner) 博士の同僚も同じように主張しています。概して若者やリベラルな見解の人 (取り上げた人に多くの人を加えることができる) は、閲覧室の日曜開館を求めているのです。ほんの少数が反対しているに過ぎません。アセニウム館長プール ([William Frederick] Poole [1821-1894]) 氏は正統派に属しますが、日曜開館の支持を公表する権限を私にくださいました。プール氏は何の困難も危険もないと述べています。閲覧室は静かな読者で埋まり、2週間経てば誰も日曜開館について考えなくなるであろうということです。

抗議者の前提の危険性

これらの抗議の根拠を調べてきました。これ以上のことを検討するつもりはありません。日曜開館が誰かに害を及ぼすとは想定されません。単に、ある人びとは他の人びとが共通の善になることを行うということを選択しないだけのことです。それは信仰においてしないのですが、たとえそれが信仰を促進してもしないのです。提示された問題は、閲覧室および全図書館の開館問題でも、娯楽やリクリエーションの問題でもありません。図書館利用を妨害する権利、神の名によって遊興を禁じる権利があるとの仮定は、支持できないし容認できないと知識人なら誰でも知っています。神というのは、彼らが見る神であり、その律法であり、適用しようと選択した律法の神なのです。炎と血によって議論され、国と教会を根底から揺り動かした問題を提起するものです。人間の知識や理性が信頼でき、永続する知恵があるとするならば、その問題は解決されました。さまざまな宗派自身の名称さえ、もし私にそれほどの時間があれば、言うべき以上のことを示唆しています。開館反対者は、自分たちが立脚している土台、自分たちが求めているものを理解していないのです。＜中略＞

広い見解をもち、関係あるものとして、あなた方に開いて提示しようとする問題を考えてください。宗派や階級ではなく、国、社会、教会、宗教、平和、人間性をです。そこで私は抗議者自身のためにあなたがたに問いかけます。抗議者に耳を貸さないでください。というのはこうした永続的な利益を損なう間にも、抗議者の意見は広まらず、自滅するからです。本当に必要なことがあるなら、試練がきたほうがいいのです。昔そうだったように、貧しい女が処刑されるため通りを喜んで進むことを選んだ方がいいのです。バーンズ ([Anthony] Burns [1834-1862; 逃亡奴隷]) がステート (State) 街を行進するのを好んだように、またギャリソン ([William] Garrison [1805-1879; 急進的奴隷解放論者]) が首に絞首索をつけて引き回

されるのを好んだように。決して恐れずに真理は勝つと信じて。しかし今ここで確かに、人が人であり、はっきりと口に出せば、その必要はないのです。法を曲げようとするのは抗議者なのです。くさびを打ち込もうとしているのは抗議者です。世界が目撃したような宗教的迫害があった時は過ぎ去ったと想像します。我われが生きている時代、メキシコ戦争、クリミア戦争、そしてヨーロッパとアメリカの戦争の前に、学者たちは「平和と国際会議」（Peace and Congresses of Nations）についてエッセイを書きました。そして至福千年が到来したと思いました。もし到来すれば、よいことです。少なくともボストンは、そのとき犯した間違いを後悔し、生きる信仰を持っているという証拠に、本件を挙げましょう。空気を清浄にするために嵐が必要なら、嵐をこさせましょう。知識への扉を開けても嵐の回避に何もできないとしても、少なくとも試みましょう。ちょうど小さな鉄の避雷針が大きな雲をはき出し、傍の家を守るように。

付録＜省略＞

(6)

公立図書館の閲覧室における日曜開館に関する報告

ボストン市、市文書第75号、1867年7月27日

Report on Opening the Reading Room of the Public Library on Sundays,
1867, Boston, City Document, No. 75.

ボストン市

市議会下院 1867年7月27日

「公立図書館に関する両院合同委員会」は、公立図書館の閲覧室における日曜開館について、請願者や抗議者に聴聞会を開くとの指示を添えて、報告を再審議するように要請された。本委員会は課された任務を遂行し、謹んで以下の報告を提出する。

報告

命令に基づき長時間の会議を4回開催し、そこでは両派、とりわけ抗議派の意見を聞くために十分な機会を設けた。審議の過程で法律問題が指摘された。すなわち市議会が州法の下では公立図書館のどの部分も日曜開館する権限を持たないというのである。州法は「必要（necessity）および慈善（charity）」を除いて、いかなる仕事も日曜日に行うことを禁じている。条例に則してこの問題を正当に解決するために、本委員会はただちに市法務官（City Solicitor）に相談を行った。市法務官はこの問題を徹底的に調べ、また著名な法律家に相談して意見を強化し、本委員会の問いかけに対して次のような正式の回答をしてきた。

市法務官事務所 コート（Court）街46番地

ボストン 1867年7月25日

貴「公立図書館に関する合同両院委員会」から、以下の問題について照会を受けた。

1. 「ボストン公立図書館あるいはその一部分を住民の利用のために日曜開館することは、安息日の正しい遵守にかかわるマサチューセッツ州法の字義あるいは精神に違反するのか」。
2. 「マサチューセッツ州法は、必要 (necessity) あるいは慈善 (charity) を除いて、安息日にいかなる仕事を行うことも禁じている。公立図書館を日曜開館するという市議会の命令は、州法違反のかどで図書館職員 (officers) が法的に起訴されることになるのか」。

マサチューセッツ州法第84条の1項と2項は、以下に刑罰を科している。いかなる「店、倉庫、作業場」を開くこと、「必要および慈善の仕事を除いて、何らかの形態の労働、ビジネス、仕事」を行うこと、それに必要あるいは慈善を除いて、主の日に旅行をすること。

こうした条項および判例に照らして、次のような意見を回答とする。公立図書館を住民の利用のために日曜開館することはマサチューセッツ州法に違反する。公立図書館の日曜開館は、必要あるいは慈善という例外の範疇に入らない。公立図書館を住民の利用のために日曜開館する人は、同州法が定める刑罰に服することになる。

敬具

J.P.ヒーリー (J.P. HEALY)

行政委員ガフィールド (GAFFIELD) 殿
公立図書館に関する委員会

本委員会が指摘するまでもないが、この判断が下された州法は非常に古い法律であり、現在では「主の日」の一般的習慣として許されている多くの事柄を、依然として禁止している。しかしながら、本委員会はこうした現状に意見を述べるつもりはなく、それは各市民の思慮深い検討に委ねたい。

公立図書館あるいはその一部分を日曜開館する件については、すでに10年以上にわたって主張されてきているが、法律問題が出されたのは今回が最初である。

本委員会は上述の市法務官の判断に照らして、本件についてこれ以上の措置が取られないよう謹んで勧告する。

チャールズ・W.スラック (CHAS. W. SLACK)
トマス・ガフィールド (THOMAS GAFFIELD)
ニュートン・タルボット (NEWTON TALBOT)
エレミア・L.ニュートン (JEREMIAH L. NEWTON)
アルフォンゾ・バウマン (ALFONSO BOWMAN)
ジョン・F.ジャーヴィス (JOHN F. JARVIS)
トマス・ゴギン (THOMAS GOGIN)
H.バー・克蘭デル (H. BURR CRANDALL)

委員会

(7)

公立図書館の日曜開館に関する委員会報告

ボストン市、市文書第97号、1870年10月31日

Report of the Committee on the Opening of the Public Library on Sunday,
1870, Boston, *City Document*, No. 97.

ボストン市

市議会上院 1870年10月31日

「公立図書館に関する両院合同委員会」は、公立図書館の日曜開館の妥当性を検討するように求められた。また開館に賛成、反対の請願が回されてきた。前者については、ジェイムズ・フリーマン・クラーク（James Freeman Clarke）と608名の署名、チャールズ・W.スラック（Charles W. Slack）と200名の署名の請願があった。後者については、エドモンド・Kオールデン（Edmund K. Alden）と255名の署名、エズラ・ファーンズワース（Ezra Farnsworth）と525名の署名の請願があった。本委員会は本件を慎重審議し、謹んで以下の報告を提出する。

報告

公立図書館全体あるいはその一部分をボストン市民の利用のために日曜開館するという問題について、市議会はこれまでに数回にわたって検討してきた。1865年に市議会両院は、「図書館理事会に対して、公立図書館の閲覧室を午後5時から午後10時まで日曜開館する措置を講じるよう要請する」命令を採択した。しかしこの命令は市長に拒否され、市長の拒否を乗り越えるだけの賛成票が議会で獲得できず失敗した。

1867年にも本件が、日曜開館の賛成、反対の請願とともに市政府に持ち込まれてきた。そして「公立図書館に関する委員会」に付託された。

「公立図書館に関する委員会」は、図書館理事会に対して、毎週日曜日の午後2時から午後10時まで、図書館の閲覧室を一般住民の利用のために、理事会が定める規則の下に開館することを要請する命令を報告した。少しの検討ののち、この命令は再び委員会に戻され、そこでは賛成者や反対者との聴聞会を開くように指示していた。その後の聴聞会で、まず図書館を日曜開館する権限問題が出された。そして市法務官の意見は、主の日の遵守に関するマサチューセッツ州法の規定に違反するというものであった。この意見を受けて、同委員会は本件についてこれ以上の措置を取られないよう勧告し、報告は受領された。

日曜日に図書館や閲覧室を開館できるように、州議会の各会期に州法の修正に取り組まれたが、これまで成功していない。

以上が、本委員会に本件が付託されてきたときの状況である。何回かの聴聞会を開催し、提案中の日曜開館に賛成、反対の人をすべて招いた。また書面や口頭で意見表明の機会を十分にとった。公聴会の模様は新聞が詳細に報告しているので、本委員会に提示された多種多様な意見をこの場で再現する必要はない。

本委員会の委員が市法務官に問い合わせを行い、以下のような回答を得た。

「公立図書館の日曜開館の問題に関して、州法にも裁判所による最近の判決にも変化はない。本件についての本官の意見は、従前のものと相違がなく、それは1867年の『市文書』第75号に示され、刊行されている」。

「おそらく本官の意見は州議会の今会期の動きによって少々裏付けられよう。図書館の日曜開館の権限を付与する法案が、提出、審議され、そして拒否された。州法がすでに日曜開館を許しているのなら、現在取り組まれているような州議会での動きは不必要であつたろう。そして本官が諸報告を読む限り、本件に関する討議は、日曜開館は法に違反するとの理論どおりに進んでいる」。

本委員会の多数派の明確な意見は、道徳的および教育的観点からして、住民への日曜開館は大いに利益があるという考えである。しかしながら、日曜開館の合法性が問題にされるなかで、日曜開館を勧告するのは賢明であるとは思っていない。多くの有力市民は、主の日の適正な遵守に違反するとみなす事柄を考慮して、現状の変更に強く反対している。こうした強い反対がために、変更を好む側に必要なことは、合法性にまつわるあらゆる疑問を除去することである。そうでないと、変更を好む人びとの行動は、公立図書館の最善の利益を傷つけることになる。日曜開館支持者も公立図書館の利益の拡大を願っている。

以上のことから、本委員会は以下に添えている命令が採択されるように勧告して、結論とする。州法がボストン市に公立図書館の日曜開館の権限を授けるように、主の日の遵守にかかわる州法の変更をすべく、市長に対して州議会の次の会期に取り組むように要請する。

委員会

F.W. ジェイコブズ (F.W. JACOBS) 委員長

命令：ボストン公立図書館あるいはその分館を市民の利用のために日曜開館する権限を得るために、市長に対して州議会の次の会期に取り組むように要請する。

(8)

図書館の日曜開館と鉄道馬車に関するエッセイ：質問

－立証された主の日－

1872年

Essay on the Sunday Library and Horse Car Questions,

1872, Boston, Alfred Mudge & Son.

M. フィールド・ファウラー (M. Field Fowler)

「主の日」(Lord's Day) というのは新約聖書において週の第1日目に当てられた唯一の語である。しかし我われは、主の日と日曜日 (Sunday)、キリスト教の安息日 (Sabbath) を同義語として使用してきた。安息日はヘブライ語である。その意味は休息 (rest) である。週の7日目にユダヤ人が休息したように、それはユダヤ人の安息日である。そして安息日という語の使用は多くの人がとに混乱を生じさせた。異教徒の語としての日曜日と主の日は、エリザベス女王の治世まで週の最初の日として使われてきた。ピューリタンは自分たちの極端な見解を伝えるために安息日という言葉を採用した。イタリア人やローマ人は安息日 (Sabbato) を土曜日だとした。我われがいう日曜日、すなわち週の最初に日に対してロシア人が使った用語は「復活」(Resurrection) を意味している。安息日あるいは休息の日は創造の記録を包んだ冠である。神は自らの似姿に人間を造られた。そして休息されたのだ。神は目に見えない。従って、似姿というのは可視の相似性ではなく、精神にある。魂、知性、霊性、創造力、理性、あるいは内なる人のことである。「人を造ろう」(創世記1: 26)。神は聖書の中で、複数形で4回こう言われた。1人の神の中に3人の人格があるという神秘を、我われに覚えさせるためである。さて、つぎに新約聖書に移ろう。我われに (us) が何を意味するか見てみよう。パウロはコロサイ人への手紙第1章の中で、キリストは誰かと告げ、「御子は、見えない神のかたち (image) であり」[コロサイ人への手紙1: 15] と言っている。また、「なぜなら、天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、見えないもの、・・・すべて御子によって造られた」[コロサイ人への手紙1: 16] からであると言い、キリストの十字架上で流された血によって、天と地のすべての事物は彼ご自身と和解されたと言っている。ヘブル人への手紙第1章は神の子としての救い主について語っている。御子は「神の栄光に輝き、また神の本質の完全な現れ (image) であり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。また、罪のきよめを成し遂げて、すぐれた高い所の大能者の右の座に着かれました」[ヘブル人への手紙1: 3] とある。また10節でも、「主よ、あなたは初めに地の基を据えられました。天も、あなたの御手のわざです」となっている。安息日の起源について、また、第四の掟の道徳的義務に関しては、矛盾する意見で当惑する。それで、ピラト (Pilate) がイエスに「真理とは何ですか」[ヨハネの福音書18: 38] と尋ねたように問いたい。明らかに神はアダムとその子孫の心に休息の思想と必要性を刻んだようである。また、人は6日働き（時間は定められていない）、7日目に休息する。これは宗教的義務や礼拝のためである。それは人が毎日の仕事に精出していると実行できないことである。

人は6日目に造られた。それははっきりした期間ではない。おそらく何千年であろう。しかし1つ確かなことは、次の日あるいは7日目は人の生活の最初の日であつたに違いない。休息の日は、神が創造を終えた後の最初の日に技を終わられたように、その日を休息し、祝し、聖なる日としたのだ。アダムはエデンの園に置かれ、そこを維持管理することになった。「六日間、働いて」[出エジプト記20: 9] というのは、樂園において最初に与えられた命令で、義務および祝福としてである。普遍的な経験が示すとおり、我われの繁栄や幸福は仕事と結びついている。我われの救い主とその使徒たちは絶えず行い [仕事] とよき行いのことに言及する。キリストはユダヤ人に言った。「わたしの父は今に至るまで働いておられます。ですからわたしも

働いているのです」[ヨハネの福音書5: 17]。ユダは、我われは信仰によって救われるが、「行いのない信仰は、死んでいるのです」[ヤコブの手紙2: 26] と言う[これはファウラーの誤りで、ユダではなくヤコブである]。従って、神の計画の一部として労働は必要であり、休息もまた必要である。行いとよき行いは必ずしも労働を指すわけではない。我われは行動し、動き、そして体や頭を働かす。人生を楽しむためであり、喜びを引き出すためである。動いてはいけないとか、じっとしていると言われたら、我われは惨めで不幸になるだろう。ユダヤ人の安息日の起源については、さまざまな意見があるだろう。大洪水以前の人びとが安息日、あるいは休息日をどのように守ったかについては、ほとんどわかっていない。聖書でメルキゼデク(Melchisedec)という大祭司について記述がある。メルキゼデクに対してアブラハムと、そしてそのときはまだ生まれていないレビ(Levi)は十分の一を支払った。そのことは当時の祭司職や礼拝には序列があり、もちろん礼拝の時間が存在したことを示している。彼らには毎週の休息日あるいはヘブライ語で「休息」を意味する安息日があったと推測したくなる。モーゼにとって、そのことが耳新しいことでなかったのは明らかである。十戒がシナイから与えられる前からそのことに言及している。安息日はモーゼ以前の起源を持つことを示している(出エジプト記16: 23)。モーゼ以前に聖書には何の記述もないから、安息日は存在しないと解釈するならば、士師(Judges)の時代の450年のあいだ安息日は知られていないと仮定できるが、それは間違っている。ラバン(Laban)は週について語っている。アッシリア人、エジプト人、アラビア人、フェニキア人、そのほか偶像崇拜の民族は、7曜を慣習としていた。(詩編68章によると)シナイからイスラエル人に与えられた律法で第四の掟「安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ」[出エジプト記20: 8]を広めたのは、神の第二格であるイエス・キリストであった。創造からの順番として7日目が定められていない。そして、「覚えよ」(remember)という語はそれが古い法であることを暗示している。それからその理由を示している。「それは主が六日のうちに、天と地・・・を造り」[出エジプト記20: 11]と。しかし、ホレブ(Horeb)で再び十戒が与えられたとき、彼らが「覚え」(remember)しなければならないのは、エジプト人から贖いあるいは救出されたからである。

これは反駁の余地がない。十戒の中の第四の掟は安息日を制度としていない。しかし、ユダヤ人にはそれが十戒の中でも、ユダヤ人の道徳的な幸福、永遠の幸福を維持するために必要なものとして定着した。しかし、それまで人類はそのような法や掟なしできたという考えは尊大である。もっとも、人類は墮落し、アダムの時以来おそろしく邪まになってきたが。安息日あるいは休息の日は根づいたものであり、自然の法である。そしてユダヤ人やキリスト教徒の心に刻まれている。それを破ることは、労働や行い、あるいは合理的に生活を楽しむための肉体的、精神的な力を減少させる。マホメット教徒は金曜日を守る。ユダヤ人は土曜日、そしてキリスト教徒は日曜日である。1793年にフランスは日曜日を廃止し、10日目を休息日と定めた。その結果、悪魔さえ耐えられないほどひどいことになった。

安息日や7日に1日の休息をとるという神の計画をないがしろにするような国民が、啓蒙され、独創的で幸福で、繁栄したことはなかった。ウジェニー女帝(Empress Eugenie [1826-1920])の私設司祭顧問であるムロワ修道院長(abbé Mullois)はこう語っている。50歳とい

う老齡は当時のフランスでは安息日を破るための特徴の1つである。すべての聖職者が試してみた結果、7日のうち1日を休息にして仕事を休むことによって、知性も体も驚くほど元気になることを認識するのである。休息しない人は心身ともすぐ疲れ果てる。明らかに旧・新イングランドでは、ともにそのすばらしいエネルギー、活力、男らしい性格、内省的な良識、技、人間を動物より高貴にするあらゆる成功は、日曜日を守ることに負っている。我われの先祖はこのことを知っていたので、モーゼがユダヤ人に課したと同じくらい厳しい罰則をもって、休息日を守らせた。偽キリスト教徒や現代の嘲笑者は、あざ笑って「ユダヤのような」法律だと呼ぶ。そしてキリストはそれを廃止したのだと主張する。しかし休息日を守ることは我われの不滅性の証であり、日曜日にニューイングランドの教会の鐘が鳴るのは、世俗と宗教的な安寧の保証であり安全なのである。新しい発見が今なされた。第四の掟が廃棄されたのだ。人びとは神の家に招かれる代わりに、日曜日に公立図書館を訪れるよう呼び掛けられている。市や町のお偉方は図書館に鐘をつけることだろう。そしておそらく市長か行政委員がその鐘を鳴らすだろう。それらは教会のライバルになるとか、教会へ行かない人びとの逃げ場になるとか、あるいはホームレスの人びとの避難場になると言われている。

しかし〔第四の掟の廃止論者は〕救い主が1800年前に第四の掟を廃止したと言う。したがって日曜日あるいは安息日という法律が実際あるのかどうかという疑問はあるようだ。事実、ユダヤ人以外、そのような法律や、規定や慣習はなかったと〔第四の掟の廃止論者〕は言う。また、ユダヤ人たちでさえ第四の掟を無視し、子どもたちを安息日に公立学校に登校させていると言われている。第四あるいは十戒に型あるいは儀式的なものがあるとか、他の9つの掟はキリスト教徒よりユダヤ人を拘束するというふりをする人はいない。振り出しに戻り、この点を検討しよう。人の生活の最初の日から7日目は、人にとって週の最初の日で、創造の時よりユダヤ人がエジプトから解放されるときまで、神が命ずるとおり聖なるものであった。その年の初めに安息日は7日目と変更された。出エジプトの日を記念するためである。それはもともと神からの恩恵であった。鞭や重荷ではなく、祝福であり特権であった。またそれはアブラハムのすべての子どもに属する。アブラハムの子とは救い主イエスに信仰によって子とされた人のことである（ガラテア人への手紙3: 29を参照）。我われがキリスト教徒であれば、我われはアブラハムの種である。そして約束にしたがってアブラハムの後継者である。キリストが安息日を廃止あるいはその拘束力を減じたという考えは、盗みや殺人に対してキリストが十戒を廃止したということと同じほど愚かな考えである。もし、これらが道徳的な攻撃なら、石版に刻まれる前からそうであったはずである。なぜ第四の掟あるいは安息日が破られるのか。人は神の律法を破ると、自分自身を傷つけるだけであることを忘れている。また、十戒は愛と慈悲で与えられていることを忘れている。それは神と幸福へ我われを導く案内板である。神が自らの律法を変えると仮定することは神の完全な性質を反映し、文字通り神性をご自分と反対のところに置くことになる。キリストはパリサイ的な安息日遵守に対してユダヤ人を非難した。弟子たちにはよき行いをするよう、また神を礼拝し、安息日には神の子イエス・キリストに栄光を与えるよう教えた。キリストは律法を破るのではなく成就するために来たのだから。

十戒がユダヤ人のみに発せられた、従って我われを拘束しないとするならば、パウロのロー

マ[・]人[・]だ[・]け[・]に宛てた手紙や、テモテ (Timothy) だ[・]け[・]に宛てた手紙は、我われに対するものではないと証明したほうがよい。イエスは権威あるものとして十戒を何度も引用した。パウロもエペソ (Ephesus) の異教徒たちへ書くときに同じように用いた。ユダヤ人の安息日は救い主が復活した朝とともに「いわば」墓からよみがえった。そして「主の日」になったのである。人の子、安息日の主は、贖いが完成したことを知った。それは創造以上に栄光ある行いであった。ヨハネの福音書第1章に、イエス・キリストの神性、人間性、そしてその働きが記されている。「世の罪を取り除く神の子羊」[ヨハネの福音書1: 24]、アブラハムから出た方である。また、大祭司であり、モーゼや他の預言者が書き記した御方であり、週[・]の初[・]め[・]の[・]日[・]に天に上がって行かれた。最も著名な聖書批評家の意見においても、ヘブル人への手紙4章9, 10節にあり、安息日が週[・]の7日目から1日目に変わったことが明示されている。そこで「休息」(rest)と翻訳されている語は原語で「サバチモス」(Sabbatimos) であり、「アナパウシス」(anapausis [recreation]) とは異なる語である。それは先行のテキストまた以後記載されたテキストにも使われている。エゼキエル (43章) は幻の中で預言した。これらの日が終わると、「8日目」以後、すなわち、キリスト、われらの大祭司は「罪のために一つの永遠のいけにえをささげて後、神の右の座に着」(ヘブル人への手紙10: 12) かれたと。第三の位格である聖霊はペンテコステの時に下ってきた。それは週の最初の日だった。ペンテコステは週の第1日を聖別する新しい形であった。その日に使徒たちは集まった。キリストはその日、栄光の体で使徒たちに会った。それで、初期のキリスト教徒たちはその日に集まり、ユダヤ人の安息日の代わりにその日を守った。したがって、キリストとその信徒たちが神の導きによって、「主の日」あるいは休息の日あるいは安息日と呼ぶようになったのは明らかである。これを疑うことは新約聖書の土台と歴史全体を疑うことになる。聖ヨハネは20章19節で次のように積極的に主張している。キリストは復活後に弟子たちの前に姿を現した。「週[・]の初[・]め[・]の[・]日[・] [の夕方] のことであつたが」、弟子たちはユダヤ人たちを恐れて扉を堅く閉めていた。キリストが手と脇腹を見せた後、弟子たちは喜んだ。さらにキリストは「平安があなたがたにあるように。……父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わします」[ヨハネの福音書20: 19, 21]と言われた。こう言われた後、キリストは弟子たちに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい」[ヨハネの福音書20: 22]。しかし揚げ足取りの人は、キリストは安息日を押しつけなかったし、それを守らないからと言って非難しなかったと言う。キリストは奴隷制度という罪を非難しなかった。その当時、奴隷制度は恐ろしい形で存在していた。また、異教徒の百人隊長がイエスに自分の奴隷を単に言葉でいやしてくれと頼んだとき、イエスはそのような権威を有したり行使したりして罪を犯したと言う代わりに、百人隊長をひどくほめたのである。「わたしはイスラエルのうちのだれにも、このような信仰を見たことはありません」[マタイの福音書8: 5] と。姦淫の現場でとらえられた女がキリストの前に引き出されたとき、イエスは「私もあなたを罪に定めない」[ヨハネの福音書8: 11] と言った。キリストが安息日への冒涇を承認したということは、姦淫を承認したということと同じである。「安息日は人間のために設けられたのです。人間が安息日のために造られたものではありません」[マルコの福音書2: 27]。「安息日は人間のために設けられた」[マルコの福音書2: 27] が、キリストは安息日の主であ

る。また、こういう意見もある。聖なる事項のなかに安息日はない。救い主が次のように言っている。「宮にいる祭司たちは安息日の神聖を冒しても罪にならない」[マタイの福音書12: 5]。7日目を支持する人は天文学的な計算によって、あるいは電報によって、7日目がいつから始まりいつ終わるのか示すことができるだろうか。太陽に従い、7日目を探すために地球をぐるりとまわっても、家に着いたとき、自分たちはキリスト者が主の日に使っている同じ時間に、礼拝していると知って愕然とするだろう。千年は神にとって1日の如しである。神は第四の掟において安息日を聖なるものとした。しかし、神は7日目を聖なるものとしたわけではない。また、ユダヤ人に7日目を覚えるように言ったわけではない。神の意図と意味は明らかに、6日間働き、休息と礼拝のため人の人生の7分の1を守るということであった。「7年目の安息年」はユダヤ人の間では存在した。「7」は聖書では象徴的な数で、「完成」、「完全」、「適合」などの意味を持ち、「7つの捧げもの」、「7つの燭台」、「7つの封印」、「7つのラッパ」として用いられている。ノアが箱船に入った後、「7」日目に洪水が地上を覆ったとある。また箱船は「7」か月目にアララト（Ararat）山に止まった。ノアが鳩を飛ばしたが、箱船に戻ってきた。そして「7」日待って、再び鳩を飛ばした。鳩は夕方に戻ってきたが口にはオリーブの葉をくわえてきた。さらに「7」日たってから鳩を飛ばすと、もう戻ってこなかった。地に降りたときノアが最初にしたことは、主に祭壇を築くことで、その祭壇の上で全焼の生け贄を捧げた。それは明らかに神の命令ではなく行ったことである（神への礼拝はノアの洪水後ということを示している）。「主は、そのなだめのかおりをかがれ、主は心の中でこう仰せられた。『わたしは、決して再び人のゆえに、この地をのろうことはすまい。人の心の思い計ることは、初めから悪であるからだ。・・・』」[創世記8: 21]。イメージと「想像力」(imagination)は大変重要な意味を持つ言葉である。人の一生の7分の1は、創造主・救い主を覚えるために聖別される。律法や慣行における1日は24時間である。しかし、それはまた広い意味を持つ。北極での1日は我われの1日とは大いに異なることを知っている。24時間のうち体のためには睡眠が必要であるが、神の霊または像は決して眠らず死ぬこともない。

安息日を聖なるものとすることで、ユダヤ人は神を礼拝していることを認識する。ユダヤ人は、偶像を礼拝する他のすべての国民と非常に異なる。主の日のキリスト教徒は、神のわざに対して神に栄光を帰す。我われの独立記念日「7月4日」を守るのと同じである。しかしもし7月4日が日曜日であれば、我われは神の方を優先する。そして次の日を祝日とする。誰もこれに異を唱えない。ユダヤ人も異教徒も、不信心者もキリスト教も異を唱えない。主の日は死に打ち勝った日、歎びと救いの日である。主の日がなければ、キリスト教はキリスト教でなくなる。我われはキリストの降誕としてクリスマスを祝う。しかし、誰もキリストの誕生日を正確には知らない。我われからそれを隠されたのは神の知恵である。聖ヨハネはパトモス島（Patmos）で主の日に霊に包まれた。これだけは我われも知っている。すなわち我われは「キリスト教徒」と呼ばれる新しい体系のもとで暮らしている。これは「ユダヤ人」あるいは「モーゼの律法」と対比してそう呼ばれる。1872年に手紙や法案を書いている人は、誰もがこれを認めている。イエス・キリストは我われの贖い主である。それで、我われは7日のうち1日を守り、主の名を祝し称える。ボストン市は公立図書館を「主の日」に開館することで、神あるいは神

の子を賛美し栄光を表すことができるのだろうか。もしできるのであれば、100人しか収容できないような1館を開くかわりに、1,000館を開けばよい。もしそれが公共の祝福となるなら、多すぎて困ることはない。開館擁護者は「知識を広める」と言うだろう。それならばなぜ市の公立学校を開き、『ポスト紙』、『トランスクリプト紙』やあらゆる日刊紙を発行しないのか。公立図書館と同じように知識を普及させるだろう。開館擁護者は、他の日にして悪いことを日曜日にするのは間違っている、他の日にして正しいことは日曜日にしても正しいと主張する。もし、この理屈が有効だとして、どうして日曜日に教会の建物の建築を続けないのか。擁護者の意見に従えば、確かにそれは適切な仕事にちがいない。そして、貧しい機械工は1日余分に給金が入る。擁護者はそれを正当化するために、他の妥当な理屈を作り出すことができる。

図書館を日曜日に開くための請願は、それが下宿住まいや家のない若者の避難所になるという。この議論がもし有効なら、帰る家がない学生にカレッジの図書館を日曜日に開くべきである。また、美術館や画廊など、そのような道徳的食べ物や好む人びとの趣味に合わせて開く必要がある。メトロポリタン鉄道会社 (Metropolitan Railroad Company) は、とりわけ教会に行く人びとを乗せるために、日曜日に数両の馬車を走らせることから始めた。しかし「くさび」が一度打たれると、「クレバス」が開く。今では約1,500人と3千頭の馬がボストンで雇われ、日曜日に鉄道馬車を走らせている。人も馬も安息日や休息日はない。それは道徳的に大きな間違いである。コミュニティを急速に墮落させる。また図書館の日曜開館を要求する声の先駆者になる。そして「主の日」の持つ聖なる性質を急速に追い出す改革となる。私は20年かけてこの問題を辛抱強く調査してきた。また私はメトロポリタン鉄道会社の創始者の1人である。ためらわずに言うが、それは馬にとって恐ろしいほどひどいことで、破壊的である。馬は昼も夜も、雨の日も照る日も、毎年毎年終わることのない単調な仕事や囲い場で働き、死んだようになっている。そうした労働によって、馬は3年から5年で役立たなくなる。車掌や御者は第四の掟を破るために採用され、まもなく三番目や八番目の掟を敬うことも忘れてしまう。害悪がそこからあらゆる方向に流れ出し、広がっていく。他の曜日に馬車に乗る人は、日曜日の仕事の損失を補填するため20パーセント余分に払うべきである。あるいは3分の1乗るのを少なくすべきである。そうすれば馬車の所有者は週日3分の1余計に距離を走らすことができるだろう。もし馬を日曜日に休ませることができるならだが。日曜日の仕事を止めるしか方法がない。多くの良きキリスト教徒や教会に行く人は日曜日に鉄道を最優先にするが、おそらく教会に引きつけられるのと同じくらい、教会から別の所に引きつけられている。そして、鉄道に乗る圧倒的に多数の人は、教会へ行かない。郊外の住民は、たくさん給料をもらう説教者、あふれんばかりの会衆を持つ素晴らしい説教者の話を聞くために、家から遠くまでやってくる。一方で、自分たちの近隣にある貧しい教会は、支援や影響面で萎えていく。日曜乗合馬車の必要性は20年前には存在しなかった。この問題に対して表面的な調査しかしない人は、日曜日の鉄道馬車から発生する連続する悪という考えを持つに至らない。

統計によると、2万人と4万頭の馬が合衆国で働いている。証明済のことだが、日曜日の営業に関しては、稼ぎの2倍がかかっている。これは不思議に思えるが、簡単に証明できる。人と馬は、機械のように、6日間働いた疲れを癒し良好な状態を保つためには、7日につき1日を必

要とする。6日で力も能力も最大限に消耗しているので、持続の問題になる。鉄道馬車でかなり使役される馬の平均労働時間は、日曜日に休息が認められ、力を補給できれば、5歳から働いたとして10年であろう。次のことは経験から証明される。つまり、このように使役された馬は6日間に120マイルから140マイル走る。何年も過重労働で苦しむことがない。しかし、もし日曜日と同じ仕事を続けることを要求されれば、3年から5年で使えなくなる。1週間毎日働かされると、馬は週100マイル以上もたないし、力も勇気も維持できない。従って、数年で馬を使い古すか、現在している日曜日の仕事をする分の25パーセントをとっておくかどうかの問題である。利己的な問題として、経営者は株主への利益のため最上の方針について意見が分かれる。もっと馬を増やし、御者や車掌に給料を払うことは、さらなる摩耗に加えて、日曜日の稼ぎの2倍を必要とする。

車掌と御者の道徳が低下し向こう見ずになる。すると危険がともない1年の経費が膨れる。そしてこれはすべて一般の人びとに降りかかる。一般の人びとがこの方式の輸送機関を維持するため、日曜以外の6日間支払いをしなくてはならない。日曜日の営業をやめれば、現在の運賃が20パーセント下がり、株主への配当は増える。これはこの問題に慣れ親しんだ人びとの意見である。そして、信頼できる、きちんとした見積りでは、安息日を破ると、ボストン、ニューヨーク、ブルックリン、フィラデルフィア、ボルティモアで日曜日の稼ぎを計算に入れても、1年に100万ドルの損がでている。驚いたことに、動物虐待防止協会は4万頭の馬が被害にあっていて恐ろしい仕打ちには目をつぶっている。もちろん経営者や場所が異なれば一概には言えないだろう。しかし、一般的に言って、馬は夜も昼も、雨の日も照る日も、毎年毎年こき使われて、ずっと苦しみ続けており、体力を減じている。遅かれ早かれ、死に至るのである。

ほかの大多数の雇用の場合、馬は少なくとも日曜日と嵐の日は休息日である。もし日曜日の鉄道馬車よりもひどい、良心の呵責のない使い方があれば、それは戦争中であろう。ニューヨークは休息日として安息日の神聖さを奪う首謀者であった。ボストンとブルックリンはまもなくそれに従った。フィラデルフィアは何年も闘ってきたが、州法廷の最もひどい決定に屈した。ストロング（[William] Strong）判事は合衆国最高裁に昇格 [1870年] して以来、その決定に反対する意見を述べてきた。かれが王の王 [キリスト] の前にでるとき、頭には冠がかがられるであろう。日曜日の図書館開館賛成者にはストロング判事の意見を注目させたい。

ボルティモアは雄々しい闘いの後に一般投票に服従した。もっともボルティモアの市民のほぼ半数は反対したのだが。他の市も追従し、ついには大きなウバス樹のように全国を覆いだし、周りの雰囲気毒し、主の日の聖なる性質を壊している。

神の第四の掟は、明らかに我われの「家畜」の身体的な安寧のため、7分の1を「安息日」あるいは「休息」として当てるように指示している。「ユダヤ人の家畜」にしか当てはまらなないと瞬時でも考える人がいるだろうか。また、キリストはこの制約を取り去るつもりであったとか、もし地上にいたとして、日曜日の鉄道馬車を奨励するだろうと信じる人がいるだろうか。日曜日に馬を働かすことは、馬を穴から出すかわりに穴に放り込むことに似ている [「マタイの福音書」 12: 11の羊を馬に言い換えている]。馬の筋肉を1週間すべて最高限度まで働かすのだから。経験によると、馬は日曜日に休ませるともっと仕事をするようになる。休みなしに1

年中を通じて働くよりはずっとである。安息日は我われ世俗の利益、そして永遠の利益の頼みの綱である。最近になってフィラデルフィアやシンシナチで、図書館を「日曜」開館することが悪い結果を伴わないと主張されている。しかし、図書館来訪者は他の曜日の常連と同じで、ほとんど新規の来訪者はいないと言われている。したがって、他の曜日に来れない階層には益がないということを示している。最近開かれた市役所での聴聞会で、請願者はたいした議論ができなかった。また、その折、冒涇とはいわないまでも、最も衝撃的な背信を表したものがいた。そして、そうした請願者に必要なのは読書ではなく、説教であること、「モーゼの書が朗読されるときはいつでも、彼らの心にはおおいが掛かっている」[コリント人への手紙第23:15] ということを証明した。パウロが書簡でこの重要なテーマに一度もふれなかったのをいぶかしく思う。今日、聖パウロより賢明な教師がいる。パウロはそうした教師には年老いた時代遅れの人間であろう。最近に市役所で開かれた聴聞会で、引退した商人が日曜開館に抗議した。ジョシュア・ベイツ (Joshua Bates, 我われの図書館の設立者 [1788-1864]) の古い友人である。その商人は、日曜開館はベイツ氏の意図に反し、ヨーロッパの都市のあらゆる前例に反する、そしてボストンおよびボストンの青少年の性質を墮落させると言った。彼自身は堅固なユニテリアンであると明言した。さらにボストンやニューヨークで図書館の日曜開館を擁護している、敬意を払われている傑出した紳士たちは、自分には「バーベナ」やその他のかわいい植物を思い出させると言った。そうした植物は香りがなく、「主根」がない。この日曜開館運動の反対者は、この5年間安心して市法務官が非合法と公表する措置を市政府が講ずることはないだろう信じていた。責任は市政府にある。市政府はいつの日か、「安息日の主」に対して管理者の責任を釈明しなければならない。この長文エッセイを閉じるにあたって、以下の賛美歌を添えることほどふさわしい終わり方はない。この主の日を称える賛美歌は、ウェストミンスター寺院の奉献文で、司祭であるワーズワース (Wordsworth) 博士が書かれたものである。

休息の日、喜びの日よ、
 歎喜と光の日
 慈しみがあひ悲しみが癒され
 もっとも麗しく、輝く日
 主よ、いと高き方であり、身を低くされ
 王座の御前に跪き、
 謳え、聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、と
 三位一体の偉大なる御神に

創造の日に、主よ
 光が初めにあった
 主よ、われらの救いのため
 キリストは地の淵より蘇り、

勝利のわが主、あなたの上に
天より霊が降り来たり
いと栄えある主の上に
三重の光が与えられた

主はわれらを守る港
我らを囲み襲う嵐から守られる方
天の御国の川が
交差する庭園
主は、殺伐とした人生の中の、
荒涼とした砂漠の中の、ひんやりした泉
主より、ピスガの頂のように
われらは約束の地を望み見るのだ

主は聖なる天へのきざはし
天使が上り下りする梯子
日曜ごとにわれらはそのきざはしを見いだすのだ
われらの故郷である天にさらに近づくように、
日曜日は元気回復の日
それは愛の日
地上から天へ至る
甦りの日

今日、疲れた、くにたみの上に
天よりマナが降り注ぐ
聖なる会衆に
銀色のラッパが吹き鳴らす
そこでは福音の光がいや増し、
混じりけのないまばゆい光の筋がさしこむのだ
生ける水が流れ出し
魂の渇きを癒す流れとなる

新たな恵が与えられる
この日より、休息の日に
残りの日々は
祝福の霊に手を伸ばし

聖霊を賛美する

父なる神、御子なるキリストを賛美する

教会はその声を上げて

御神に、三位一体の主を誉め称える

(9)

市長メッセージ：公立図書館の日曜開館の命令を承認しない理由

ボストン市、市文書第69号, 1872年6月29日

*Mayor's Message, Giving His Reasons for not Approving the Order
Concerning the Opening of the Public Library on Sunday,
Boston, 1872, City Document, No. 69.*

ボストン市

市長部局

市役所 ボストン 1872年6月20日

市議会下院に：

貴市議会の委員会を源とする市議会の命令は、図書館理事会に対して、「公立図書館の閲覧室を開館し、日曜の午後2時から午後9時まで、図書と定期刊行物の利用を認める」ことを要請するものである。この市議会の命令が私の正式な承認を求めて回されてきた。

この命令に盛られている主題は非常に重要である。この件については高潔な性格と立派な知力の持ち主が多様な意見を持っている。この動きは、私たちの全史において人びとが大いに反対してきた実践である。またこの動きは、最終的には公立図書館の開館よりもはるかに重要な事柄を含んでいる。こうした動きを開始する前に、本当の進歩の道を歩むことになるのか、またそのことでコミュニティの世俗的、宗教的な利益を促進することになるのかを、十分に確信しなくてはならない。しかしながら、私はこの分野の問いかけをするに際して、事前に重要な2つの検討をしなくてはならないと思う。そして1つは決定的に重要なので、それを無視すると、本件についてのいかなる議論も完全に無意味になる。

こうした検討の第1のものは、市議会は条例で、図書館理事会に「公立図書館の全般的な管理と統制」権を与えているという事実である。幸運にも理事会を構成する人びとは、立派な知力、十全な能力、それに自分たちに課された重要な職責を遂行する積極的な意志を持っている。理事会は公立図書館の統制権（市議会は条例によって統制権の大部分を委譲した）を有している。もし提案中の措置が合法であり、コミュニティの宗教的、世俗的な本当の利益が求められるものならば、理事会は明らかに己の権限を行使して、そうした措置を採択するであろう。そして市議会の命令の後ろに隠れたり、己の正当な責任を回避したりすることを願わないであらう。

う。提案中の措置が法律に違反するなら、たとえ市議会が理事会に実行を要請しても、理事会は採択できない。理事会は励ましもなしに、担わされているすべての職責を忠実に遂行しており、したがってすべての問題を正当にも理事会に委ねてよい。このように判断して間違いないと思われる。

私が示唆したい1つの検討は、提案されている措置の非合法性である。日曜開館に関する私の見解がどうであろうと、法的検討だけでも抑制となり、私は命令を承認しがたい。本件について、私は非常に有能で熟達した法律家に情報を求めた。市議会が賢明に選び出した法律家で、法律問題について市議会や私の案内役になっている。すなわち市法務官である。市法務官の意見によると、公立図書館を住民の利用のために日曜開館することは、マサチューセッツ州法に違反する。私は市法務官の意見を示した文書の写しを添える。

公立図書館の日曜開館の問題は、州議会やこれまでの市議会でも審議の対象になってきた。私の理解によると、州議会では何回か州法の廃棄や修正の動きがあったが、いずれも失敗に終わっている。州議会での審議、それに廃棄や修正の失敗から推測すると、州議会は提案されている措置を違法とみなすだけでなく、法の廃棄は公共政策に反すると信じているようである。

またボストン市の記録によると、1865年に市議会は同じような命令を採択し、当時の市長が拒否権を使っている。1867年にも市議会に持ち込まれ、非常に賢明な委員会に回された。この委員会は市法務官からの意見を得たのち、「本件についてこれ以上の措置が取られないよう」と勧告した。私の知る限りでは、法律問題が浮上したのはこの時が最初である。同委員会は報告で次のように記入している。「審議の過程で法律問題が指摘された。すなわち市議会は州法の下では公立図書館のどの部分も日曜開館する権限を持たないというのである。州法は『必要（necessity）および慈善（charity）』を除いて、いかなる仕事も日曜日に行うことを禁じている。条例に即してこの問題を正当に解決するために、本委員会はただちに市法務官に相談を行った。市法務官はこの問題を徹底的に調べ、また著名な法律家に相談して意見を強化し、本委員会の問いかけに対して次のような正式の回答をしてきた」。1867年7月25日付けの市法務官の意見には解答がほのめかされており、その写しを添えておいた。1870年に市議会は再び本件を検討した。この問題は委員会に回されたのだが、同委員会の立派な報告の一部分に注目されたい。同委員会は、「本委員会の委員が市法務官に問い合わせを行い、以下のような回答を得た」と記入している。

「公立図書館の日曜開館の問題に関して、州法にも裁判所による最近の判決にも変化はない。本件についての本官の判断は、従前のものと相違がなく、それは1867年の『市文書』第75号に示され、刊行されている」。

「おそらく本官の判断は州議会の今会期の動きによって少々裏付けられよう。図書館の日曜開館の権限を付与する法案が、提出、審議され、そして拒否された。州法がすでに日曜開館を許しているのなら、現在取り組まれているような州議会での動きは不必要であったろう。そして本官が諸報告を読む限り、本件に関する討議は、日曜開館は法に違反するとの理論どおりに進んでいる」。

また同委員会は次のように記入している。

「本委員会の多数派の明確な意見は、道徳的および教育的観点からして、住民への日曜開館は大いに利益があるという考えである。しかしながら、日曜開館の合法性が問題にされるなかで、日曜開館を勧告するのは賢明であるとは思っていない。多くの有力市民は、主の日の適正な遵守に違反するとみなす事柄を考慮して、現状の変更に強く反対している。こうした強い反対がために、変更を好む側に必要なことは、合法性にまつわるあらゆる疑問を除去することである。そうでないと、変更を好む人びとの行動は、公立図書館の最善の利益を傷つけることになる。日曜開館支持者も公立図書館の利益の拡大を願っている」。

「以上のことから、本委員会は以下に添えている命令が採択されるように勧告して、結論とする。州法がボストン市に公立図書館の日曜開館の権限を授けるように、主の日の遵守にかかわる州法の変更をすべく、市長に対して州議会の次の会期に取り組むように要請する」。

「命令：ボストン公立図書館あるいはその分館を市民の利用のために日曜開館する権限を得るために、市長に対して州議会の次の会期に取り組むように要請する」。

この命令に従って州議会に持ち込まれ、州議会は十分な審議ののち、ボストン市への権限の付与を拒否した。ボストン市議会の次の動きが現在の命令である。この命令には、公立図書館理事会に対して、州議会がボストン市に権限の付与を拒否した事柄を実行するように要請している部分がある。

この命令がもし承認されるなら、当市は少なくとも州法を無視あるいは州法に反抗しているように思われる立場に置かれる。そうした立場は悪例になるであろう。またボストン市がそうした立場を占めることは、圧倒的多数の市民にとっては不本意なことだと思える。

市議会は慎重審議をもって、また市民の最善の利益を促進するという真面目な期待をもって、命令を採択した。私はそのことを知っており、非常に遺憾ではあるが、市議会の命令について公式に承認を与えることを拒否する。「著名な法律家」の判断で固められた市の法律顧問の意見、および本件に関するこれまでの州議会や市政府の歴史からして、個人的な見解や願いはともかく、市長の立場にいる人なら誰もが、本件のような命令の承認を正当化しようとする、大いに当惑する立場にあることを知るだろう。市議会はこのことを認識すると思う。

上述の理由からして、命令に含まれる要請は市議会が行うべきではないことであり、また公立図書館理事会が受け入れるべきことでもない。このように信じるので、私は謹んで、承認をせず命令を市議会に送り返す。

W.M.ガストン (W.M. GASTON) 市長

市法務官事務所 ペンバートン (Pemberton) 広場2番地
ボストン 1872年6月14日

市長殿

貴殿から照会を受けたのは以下の問題である。

「ボストン公立図書館を住民の利用のために日曜開館することは、マサチューセッツ州法の諸規定に違反するののか」。この問題はこれまでも検討した事柄であり、本官はすでに意見を表明している。

川崎：ボストン公立図書館と日曜開館問題（1864-1872年）

1867年に、市議会は公立図書館を住民の利用のために日曜開館することを審議し、「公立図書館に関する合同常任委員会」は提案中の措置についての合法性について本官に意見を求めた。照会された問題を慎重に検討し、同委員会に意見を提示した。その写しを添えている。

本件はその後も俎上に上り、ときどき再検討する必要性が生じたものの、本官が1867年に作成し表明した意見はそのままである。

敬具

J.P.ヒーリー（J.P. HEALY）

市長殿

市法務官事務所 コート（Court）街46番地

ボストン 1867年7月25日

貴「公立図書館に関する合同両院委員会」から、以下の問題について照会を受けた。

1. 「ボストン公立図書館あるいはその一部分を住民の利用のために日曜開館することは、安息日の正しい遵守にかかわるマサチューセッツ州法の字義あるいは精神に違反するの
か」。
2. 「マサチューセッツ州法は、必要（necessity）あるいは慈善（charity）を除いて、安息日にいかなる仕事を行うことも禁じている。公立図書館を日曜開館するという市議会の命令は、州法違反のかどで図書館職員（officers）が法的に起訴されることになるのか」。

マサチューセッツ州法第84条の1項と2項は、以下に刑罰を科している。いかなる「店、倉庫、作業場」を開くこと、「必要あるいは慈善の仕事を除いて、何らかの形態の労働、ビジネス、仕事」を行うこと、それに必要あるいは慈善を除いて、主の日に旅行すること。

こうした条項および判例に照らして、次のような意見を回答とする。公立図書館を住民の利用のために日曜開館することはマサチューセッツ州法に違反する。公立図書館の日曜開館は、必要あるいは慈善という例外の範疇に入らない。公立図書館を住民の利用のために日曜開館する人は、同州法が定める刑罰に服することになる。

敬具

J.P.ヒーリー（J.P. HEALY）

行政委員ガフィールド（GAFFIELD）殿

公立図書館に関する委員会

命令：公立図書館理事会に対して、公立図書館の閲覧室を開館し、日曜の午後2時から午後9時まで、図書と定期刊行物の利用を認めるように要請する。

ボストン市 市議会下院 1872年5月16日

採択。同意を求めて申し込む

M.F.ディキンソン・ジュニア（M.F. DICKINSON, Jr.） 議長

市議会上院 1872年6月10日

同意

S.リトウル (S. LITTLE) 議長

参考文献

- Boston Public Library, *Annual Report of the Trustees of the Public Library*, 1852-.
- Ditzion, Sidney, "Opening the People's Library on the Lord's Day," *School and Society*, 70, 1949, p. 49-53.
- McCrossen, Alexis, *Holy Day, Holiday: The American Sunday*, Ithaca, Cornell University Press, 2000.
- Primus, John H., *Holy Time: Moderate Puritanism and the Sabbath*, Macon, Ga., Mercer University Press, 1989.
- Rordorf, Willy, *Sunday: The History of the Day of Rest and Worship in the Earliest Centuries of the Christian Church*, translated from the German by A.A.K. Graham, London, S.C.M. Press, 1968.
- ディツィオン、シドニー『民主主義と図書館』川崎良孝・高島涼子・森耕一訳、日本図書館研究会, 1994.
- ホワイトヒル、ウォルター『ボストン市立図書館100年史：栄光、挫折、再生』川崎良孝訳（A.ヴェルトハイマー協力）日本図書館協会, 1999.
- バークレー、W.『十戒：現代倫理入門』牧野留美子訳、新教出版社, 1980.
- 川崎良孝解説・訳『ボストン市立図書館は、いかにして生まれたか：原典で読む公立図書館成立期の思想と実践』京都大学図書館情報研究会発行、日本図書館協会発売, 1999.
- 瀧澤信彦『国家と宗教の分離』早稲田大学出版部, 1985.

なお資料での聖書の引用については『新改訂 聖書』（いのちのことば社, 2005）を用いている。また訳者の補足は [] に示している。